

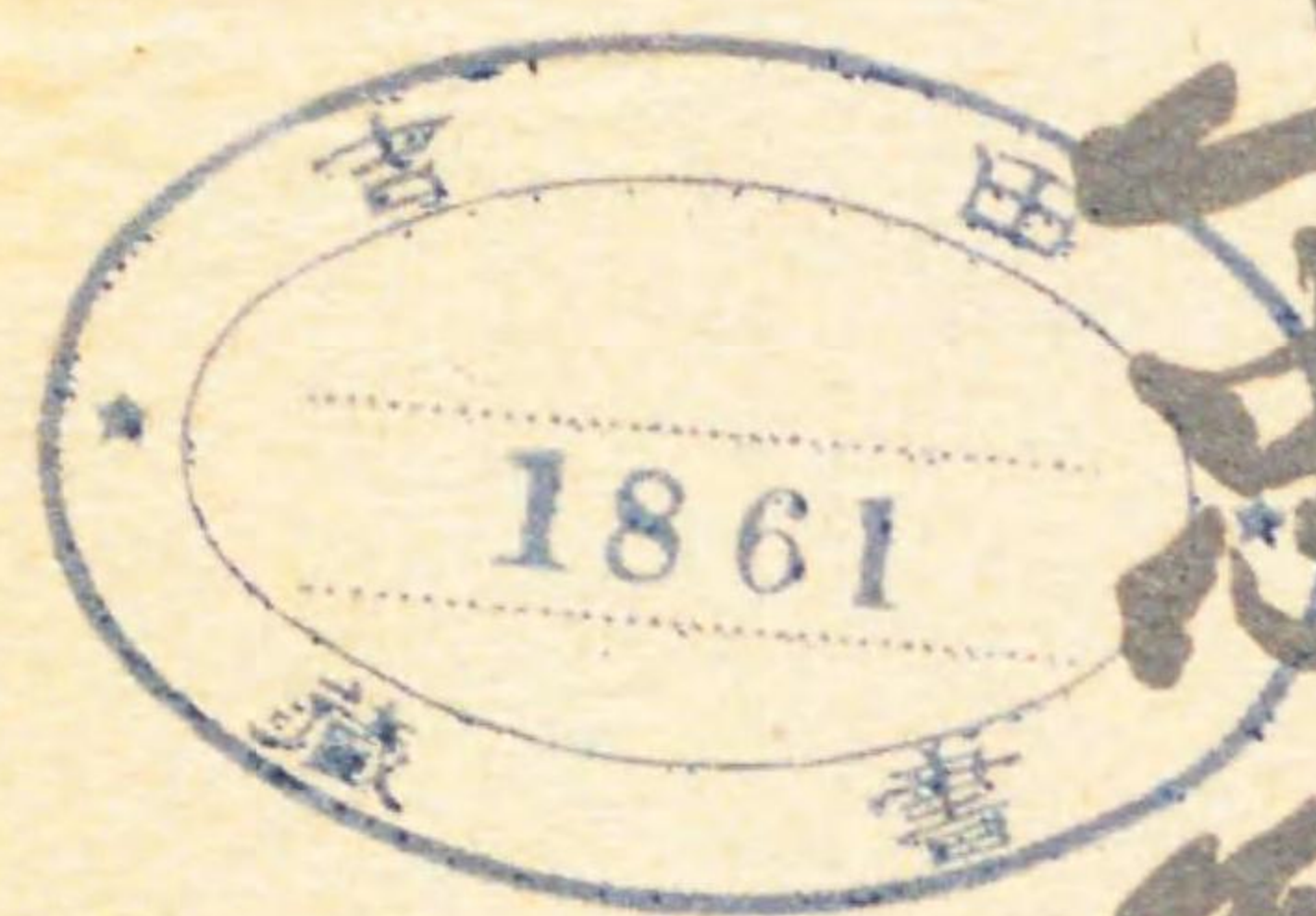


210.58
0927n

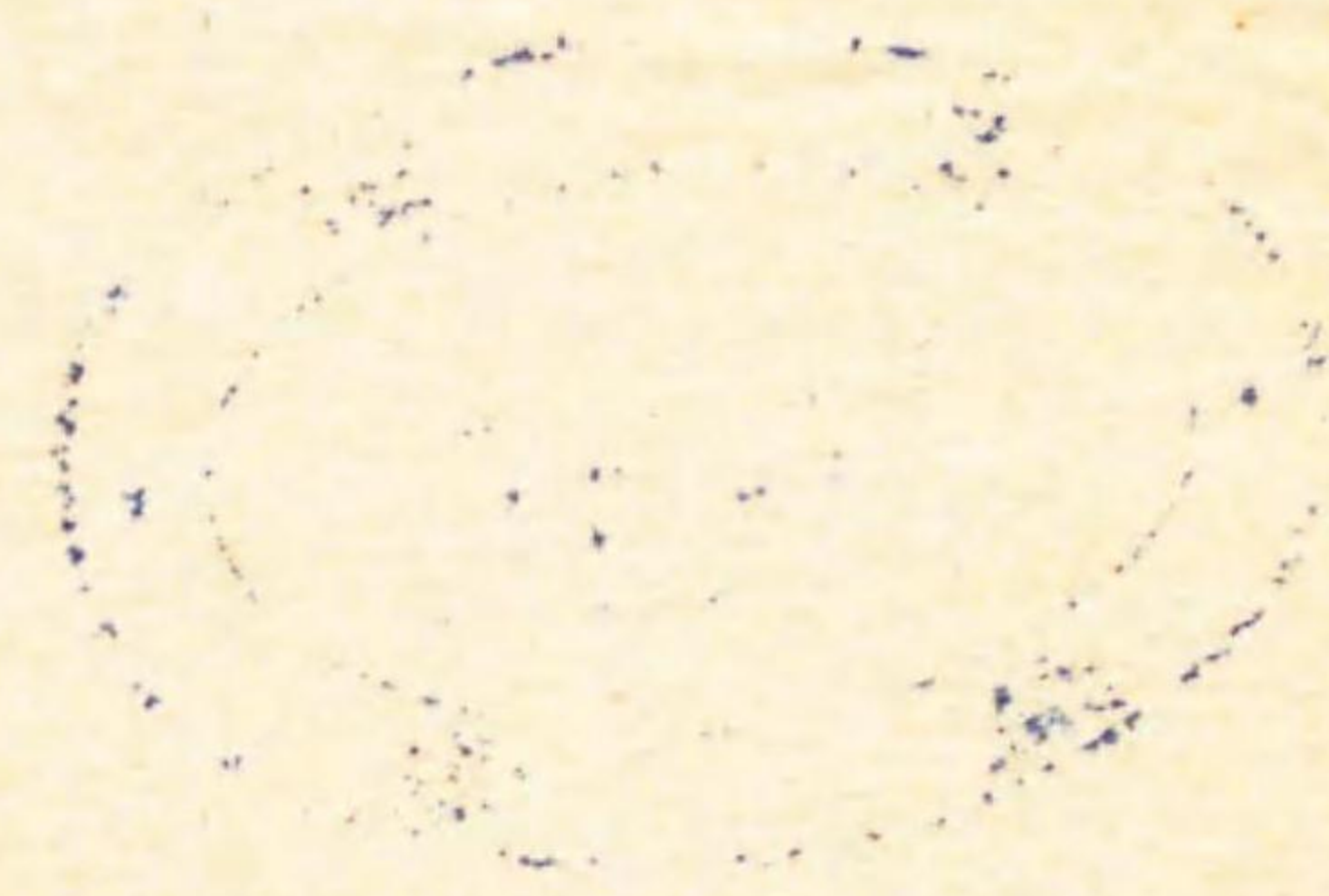
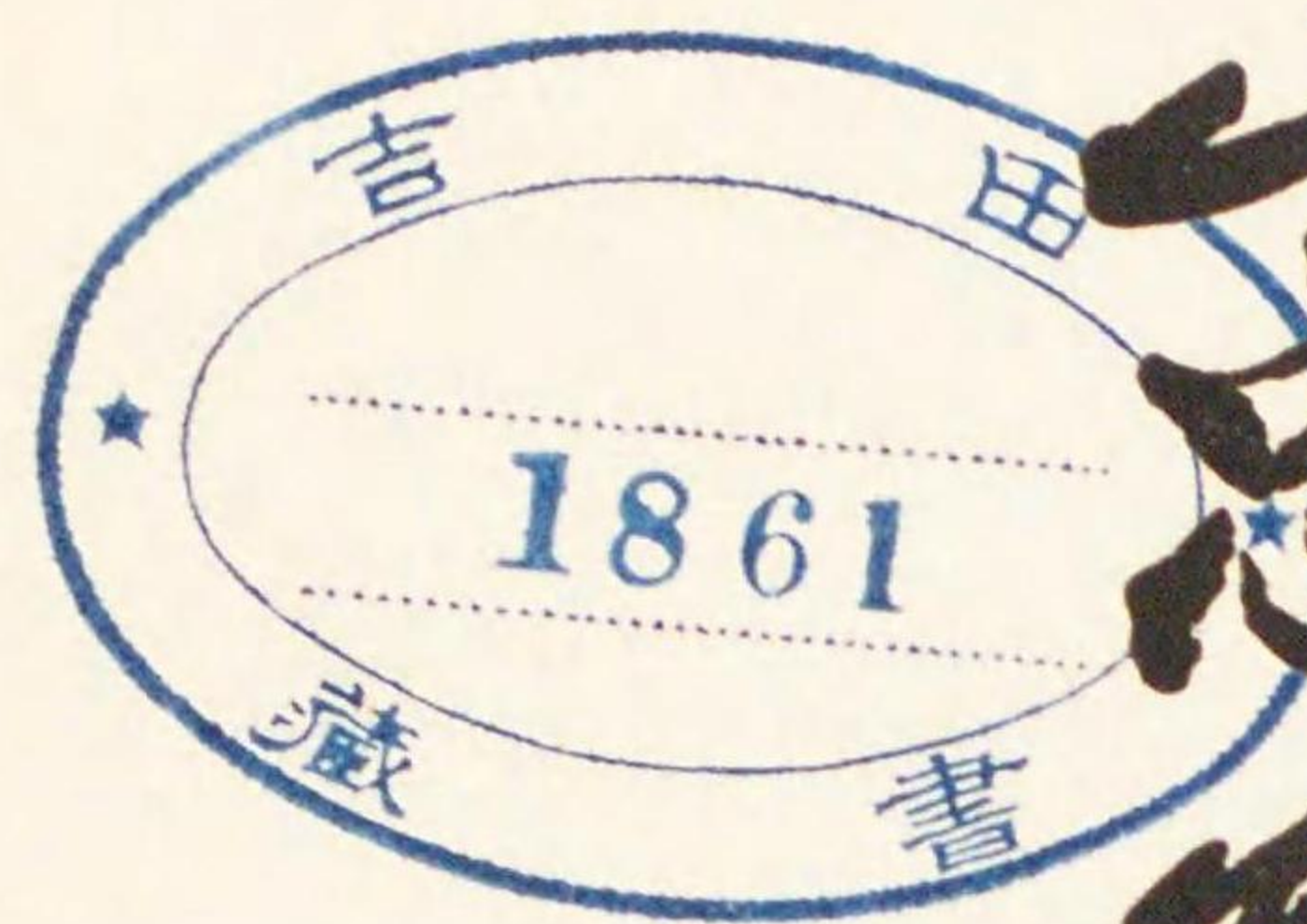




中山志能履歷資料 第二



中山忠能履歷資料 第二





212688

中山忠能履歷資料 第二

目次

| | | | |
|----------|-----------------------|---------------|----|
| 中山忠能履歷資料 | 卷五 | 自安政四年 至同五年 | |
| 一 | 下田港滯留米國官吏申立の件に付仙臺藩主上書 | 安政四年九月 | 一頁 |
| 二 | 武家傳奏東坊城聽長の辭表 | 安政五年三月十一日 | 五 |
| 三 | 詰問關東使 | 安政五年 | 六 |
| 四 | 米國通辨官等淺草觀音參詣の風聞書 | 安政五年三月 | 九 |
| 五 | 米使來朝に付觸達書案 | 安政五年四月七日 | 一二 |
| 六 | 米艦渡來の件其他 | 安政五年三・四月 | 一三 |
| 七 | 大坂城代土屋采女正より林大學頭等への進達書 | 安政五年 二月廿四日 | 一五 |
| 八 | 米使來朝に付久須美佐渡守見込上申書 | 安政五年二月 | 一六 |
| 目次 | | | 一 |

| | | | |
|----|-------------------|--------------|----|
| 九 | 米使來朝に付宸翰 | 安政五年五月十日 | 一八 |
| 一〇 | 惣登城にて幕府達書 | 安政五年四月廿五日 | 二〇 |
| 一一 | 幕府達書寫 | 安政五年四月廿五日 | 二一 |
| 一二 | 假條約の件大廣間詰及帝鑑間詰の意見 | 安政五年 | 二二 |
| 一三 | 萩藩上書 | 安政五年五月三日 | 二三 |
| 一四 | 幕役交替 | 安政五年五・六月 | 二四 |
| 一五 | 時勢風聞 | 安政五年六月六日 | 二五 |
| 一六 | 珍説 | 安政五年七月二日 | 三四 |
| 一七 | 關白より幕府へ可達呈書草稿 | 安政五年 | 三六 |
| 一八 | 異船渡來に關する書翰 | 二通 安政五年六月十八日 | 三八 |
| 一九 | 公武合體云々書翰 | 安政五年八月八日 | 四〇 |
| 二〇 | 御口上帳面 | 安政五年八月八日 | 四二 |
| 二一 | 公卿存意書 | 七通 安政五年正月十五日 | 四三 |

| | | | |
|----|------------------|-----------|-----|
| 二二 | 元寇紀略拔書 | | 五八 |
| 二三 | 詰問關東使 | 安政五年カ | 六〇 |
| 二四 | 池内大學鄙見草案 | 安政五年正月廿九日 | 六三 |
| 二五 | 時勢風聞書 | 安政五年正月―三月 | 六三 |
| 二六 | 從關東返答書殘簡 | 安政五年三月五日 | 八八 |
| 二七 | 老中より堀田備中守宛殘簡 | 安政五年三月一日 | 八八 |
| 二八 | 就墨夷申立書等 | 安政五年二月廿日 | 八九 |
| 二九 | 條約之件不容易云々等 | 安政五年二月 | 九四 |
| 三〇 | 八藩連署上書 | 安政四年八月 | 一〇三 |
| 三一 | 耶蘇誕生を起原とす記事 | | 一〇六 |
| 三二 | 關白より老中堀田正睦へ被命書其他 | 安政五年二月 | 一〇七 |
| 三三 | 老中連署上書 | 安政五年三月朔日 | 一〇八 |
| 三四 | 小御所に於て御沙汰其他 | 安政五年三月廿日 | 一一〇 |

| | | | |
|----|--------------|----------------|-----|
| 三五 | 所司代本多忠民等招命の件 | 安政五年三月廿二日 | 一一二 |
| 三六 | 風聞書 | 安政五年三月廿六日—四月朔日 | 一一三 |
| 三七 | 京都風聞書 | 安政五年四月一日—三日 | 一一〇 |
| 三八 | 公卿勅使發遣の件 | 安政五年四月 | 一二四 |
| 三九 | 擬答米國々書大意 | | 一二七 |
| 四〇 | 雜記 | | 一二七 |
| 四一 | 江戸風説 | 安政五年五月廿一日 | 一二九 |
| 四二 | 有志よりの來翰 | 安政五年五月廿一日 | 一三一 |
| 四三 | 流行鄙歌 | 安政五年 | 一三三 |

同 卷六

自萬延元年四月
至文久元年九月

| | | | |
|---|---------------|----------|-----|
| 一 | 和宮御降嫁に付老中連名書翰 | 萬延元年四月 | 一三七 |
| 二 | 同上に付宸翰 | 萬延元年五月四日 | 一三九 |

| | | | |
|----|----------------------|-------------|-----|
| 三 | 所司代酒井忠義より關白宛書翰 | 萬延元年四月 | 一四一 |
| 四 | 橋本實麗内話 | 萬延元年五月カ | 一四三 |
| 五 | 久我建通より正親町三條實愛宛書翰 | 二通 萬延元年五月九日 | 一四七 |
| 六 | 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰 | 萬延元年五月九日 | 一五一 |
| 七 | 久我建通より中山忠能宛書翰 | 萬延元年五月九日 | 一五二 |
| 八 | 和宮御降嫁に付酒井忠義より關白宛再應願書 | 萬延元年五月十日 | 一五三 |
| 九 | 三浦七兵衛より披見の書翰 | 萬延元年五月 | 一五七 |
| 一〇 | 和宮御降嫁に付老中より再應願書 | 萬延元年五月 | 一六〇 |
| 一一 | 幕府へ再度被達の叡旨及關白への宸翰 | 萬延元年六月 | 一六八 |
| 一二 | 觀行院より被入御覽の書翰 | 二通 萬延元年六月 | 一七〇 |
| 一三 | 禁裡附大久保忠良關東差下の件 | 萬延元年六月十四日 | 一七五 |
| 一四 | 老中勅答書 | 萬延元年七月十日 | 一八二 |
| 一五 | 關白への宸翰及同人請書 | 萬延元年七月十八日 | 一八九 |

一六 所司代酒井忠義より正親町三條實愛宛書翰 萬延元年七月廿日 一九一

一七 所司代酒井忠義より關白への書翰 萬延元年七月廿九日 一九四

一八 關白への宸翰 萬延元年八月六日 二〇八

一九 攘夷の達書草稿 萬延元年八月七日 二〇九

二〇 和宮御降嫁に付觀行院の意見書 萬延元年八月十二日 二一〇

二一 久我建通書翰「久世通熙宛カ」 萬延元年八月十三日 二一二

二二 久世通熙より久我建通宛書翰 萬延元年八月十三・四日 二一四

二三 正親町三條實愛より久我建通宛書翰 萬延元年八月十五日 二一九

二四 島田左近上書 萬延元年八月カ 二二〇

二五 正親町三條實愛より久我建通宛書翰其他 萬延元年八月十五日 二二一

二六 觀行院より關白への書翰 萬延元年八月十五日 二二五

二七 宸翰 二通 萬延元年八月 二二六

二八 御趣意書并關白添書土御門晴雄添書 文久元年 二二二

二九 所司代酒井忠義より久我建通等への書翰并上書 文久元年七月廿二日 二三六

三〇 所司代酒井忠義より關白への請書 文久元年七月 二三七

三一 所司代酒井忠義より關白への添書の請書 文久元年七月 二四二

三二 極秘書 文久元年七月 二四八

三三 中山忠能より久我建通宛書翰 文久元年七月廿五日 二五〇

三四 關白上書 文久元年七月廿四日 二五二

三五 宸翰 二通 文久元年七月 二五四

三六 中山忠能上書 二通 文久元年七月廿七日 二五六

三七 所司代酒井忠義上申書 文久元年八月廿五日 二五八

三八 武家傳奏より關白への直書 文久元年八月廿九日 二六二

三九 所司代酒井忠義伺書 文久元年八月廿五日 二六四

四〇 所司代より武家傳奏宛書翰 文久元年九月朔日 二六六

四一 同上 文久元年九月朔日 二六七

| | | | |
|----|-----------------|-----------|-----|
| 四二 | 同上 | 文久元年九月六日 | 二六七 |
| 四三 | 水戸領内騷擾風聞書 | 文久元年二月 | 二七〇 |
| 四四 | 山城國內窮民賑恤に關する御内旨 | 文久元年二月十一日 | 二七三 |
| 四五 | 所司代酒井忠義上申書 | 文久元年七月十八日 | 二七三 |
| 四六 | 三浦七兵衛等上書 | 文久元年七月六日 | 二七五 |
| 四七 | 和宮御東下に付觀行院返書 | 文久元年七月五日 | 二七七 |
| 四八 | 和宮東下御行列書草案 | 文久元年九月十五日 | 二七八 |
| 四九 | 時勢風聞書 | 文久元年二月 | 二八〇 |
| 五〇 | 歌稿 | 文久元年カ | 二八五 |
| 五一 | 和宮御東下陪從に付中山忠能請書 | 文久元年八月十二日 | 二八七 |
| 五二 | 武家傳奏より所司代への達書 | 文久元年六月カ | 二八八 |

同 卷七

自萬延元年四月
至文久元年十二月

○ 和宮御降嫁一件書類

自萬延元年
至文久元年

目次終り

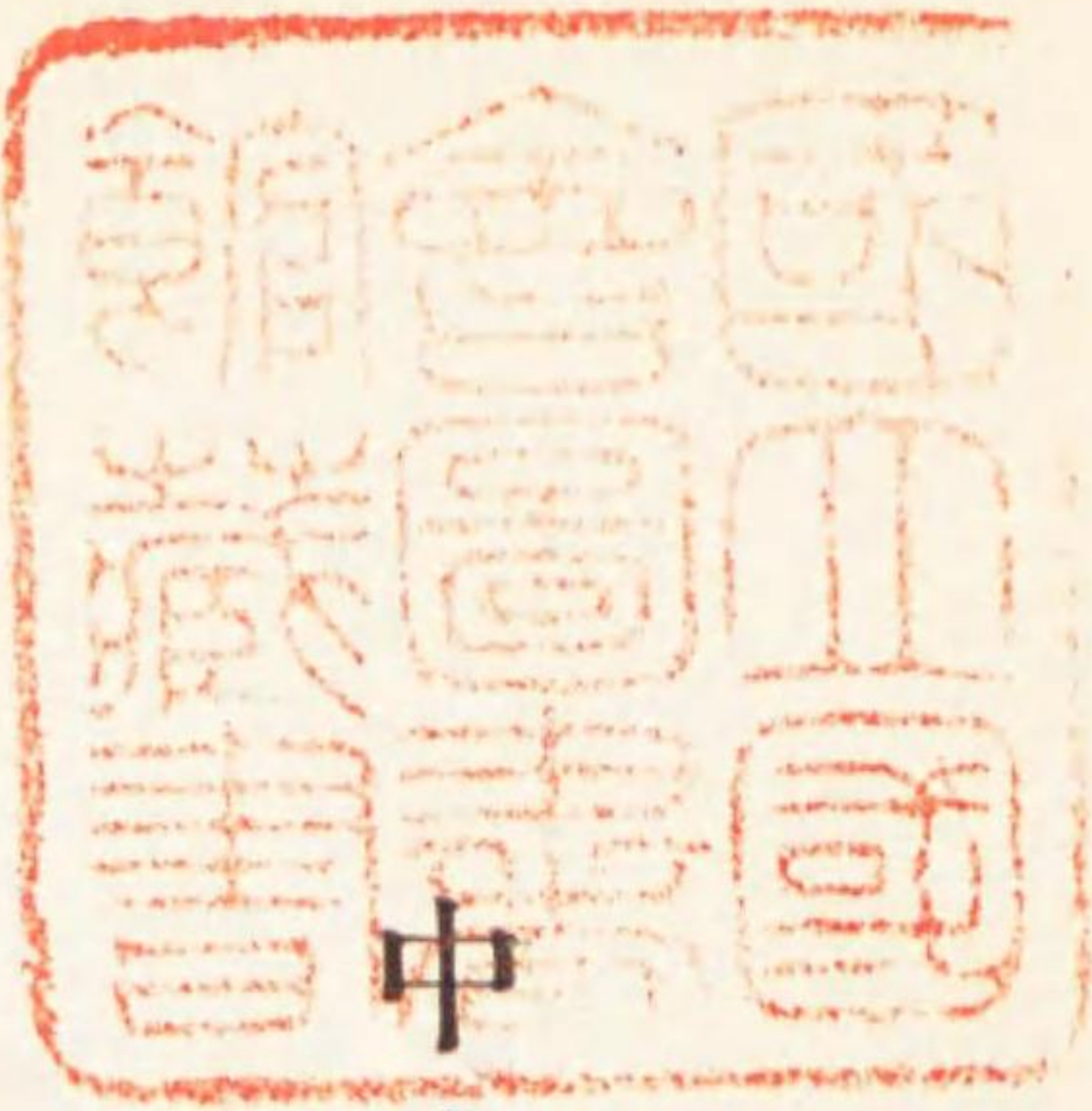
中山忠能履歷資料 第二

中山忠能履歷資料 卷五

一 下田港滯留米國官吏申立の件に付仙臺藩主

上書 安政四年九月

一 去月十五日爲心得御達有之候下田表在留之亞墨利加官吏申立之趣夷人其國書持參江戸登城相願候處寛永以前 神君御入國之頃度々登城も被仰付有之候御先矩御座候由に付條約爲取替濟之國にては登城之儀は蠻夷普通定例にて參上之上拜禮之取扱振之御沙汰に候旨右は當今之事情不得止事御事柄に可有之是又度々御先例御取扱振も有之無據筋には候へ共蠻夷之情何共後日之處視計仕候處如何之儀可仕候哉も難計 御國辱にも可到場合是亦深苦配仕候尤御連枝方始御普代之諸臣を差置外席



之私共何とも難申上次第には候へ共後日不容易仕義に可及儀有之期に到り心付候寸志之廉々不申上も積算之御國恩を爲謝之冥助と奉存候間不顧憚申上候儀は如何様にも何と歎申諭し今般之拜禮願之義は御差留被遊候方海内之治り方可然と奉存候右に付ては諸向共一般に不一通隔意心痛致居候族も有之候とも恐入差控候由粗相聞候は不忠至極に可有之哉且前條之儀に付ては當御代に到り御入國以來初て御逢も有之候義其上彼國書御直に御請取にも相成候趣左候て右書中には如何様之義入有之候哉も難計乍恐重き御職掌に被爲對彼國之官之長吏とは申條如何之人柄に有之候哉之義は夷狄之御職掌にて輕々敷御事に相聞京都に被爲對御歷代連綿之御忠功御武職御德澤も薄可相成候朝鮮琉球之兩國は是亦蠻夷の諸國共違ひ累年降好厚信之正國に候故御取扱も重く有之とは御尤之御義殊に彼國風は兎角異法を修し候は蠻狄普通に追ては可押移意念之程も難計右故 神祖建國以來堅被爲禁止候御事

有之乍併是等之義は兼て御評論も盡果居候之義を遮て戚定害申述候も恐入候へ共前顯之趣御取用は有之間敷と存候へ共不憚愚意苦惱之餘り不取敢申上候儀に御座候間寛大之御所置を以て御差留之方可然奉存候且又彌被爲召寄候に付ては頻蕃夷之意情難計諸狄迄も同様之願意申立候は必定之儀時々剋々御聞届之上被召寄候は、御城内外之模様も自然視居如何之儀に可到も難計必然之儀と奉存候然る處當世上下一般に二百餘年之星霜昇平之御治世に浴し自然虛敬弱情之士風に押移干戈之朽腐研磨も不曲勢に遷り虚號に相流候折柄之處私儀去年中蝦夷地西海之孤島嶋港共凡二百里之間一手に御警衛向仰當代之面目難有仕合奉存候付ては研磨之汚名も相消候次第にて追々廉直之士風に基可申と別て難有儀に有之且又彼地へ通路之儀は季候を計或は難涉之波濤を凌ぎ隔境之高岳を越數百里之山谷幽巖を踏越いたし候寒地故一家中を始追々御備向等多人數差向不申ては火急之場合に到り後詰手當迄も充

塞不仕候ては難義に相成次第甚以心痛仕夫故土着之士民を懐け重臣之扶助向等一通ならず取扱いたし遣し追々居合越海之上永住仕候様爲取計候儀に御座候扱又申上候迄も無之儀に候へ共一昨年震災風損之期にて當各居屋敷を始下居屋敷向とも未だ右御警衛向に取紛れ修覆向も其儘に相成居候ヶ所兩端に候へ共右様之儀は家政向殊に小事之儀自然國家之安危に拘り大事專要に相整候儀片時も難差置差急候間先不取敢下屋敷向等住居仕候家來共追々國許并蝦夷地に急速に差置御固め向安意相成候様仕度然る上は御府内屋敷内も修理之行届兼明地多相成萬端手廻り兼候間追々上地相願尤彼遠境御實之御備向等も耽迄巡覽見届候様仕度右に付江戸表參勤之儀は一際目立御警衛行届候迄は何卒在國之上時々見廻り堅固安心仕候様致度左候へは江戸參勤候心得を以國地巡見之御暇被下候様可仕志願に御座候間此段出府之上前文之寸志御内意申上候是又願之儀も御内意伺候儀に御座候以上

巳九月

松平陸奥守

右井上右衛門に借寫了二月十日重德

二 武家傳奏東坊城聰長の辭表

安政五年三月十一日

三月十四日廣橋前大納言被附議奏兩内覽濟由

不肖聰長叨蒙鴻恩武家傳奏御役勤仕誠以深恐入候既去秋退役相願候處不存寄被召留深恐懼仕候爾來墨夷一件追々相迫既安危之一舉相成候實國家重事御用多端之御時節遲鈍聰長不堪重任候深恐入候臨此期抛身命爲國爲朝竭微忠度本心候へ共何分下愚聰長固非其器當時狼狽以一身之過誤奉汚聖明候事と實深恐入候御時節柄恐入候へ共厚以御憐愍速被免御役候様偏奉願候此旨宜預御沙汰候也

三月十一日

聰長

右更に兩公内覽屬女房駿河被留 御前由被申出○十六日依願可被免被
 仰下近例所司代へ一應御沙汰有之に付明朝迄御延引光成卿被願○十七
 日辰半剋同卿行向被申述即日依願武家傳奏辭退被 聞食被加近習小番
 御免列○十七日早朝附武家都筑駿河守卒中頓發或由自殺之○十九日八十
 餘人參列被見下御返答○二十日堀田本田參 内於小御所中下段尙忠公
 忠熙公輔熙公實萬公光成建通公純正房俊克恭光等卿列座自左府渡一昏
 早大樹公へ可有進入被示仰於諸大夫間兩役和談次賜酒饌○御暇明日可
 給哉内問之處御一昏引取得と拜見之上可申左右旨一兩日御延引願旨也

嘉永七甲寅

鷄窓 正木篤著

美理哥國總記和解 三冊 常惺竹移藏櫻

三 詰問關東使

安政五年

詰問關東使

於關東隨意に接夷人不經 天裁極條約便夷人散居本地欲置 乘輿於何
 地且將軍以下極條約之輩亦欲居於何地之計に候哉詳に陳說可致候事
 此一問に應酬は濟可申候其處置と申せは速に下田夷人を追出し可申
 事

若夷人受不申之時は不得止打拂可申事

此一條詰問之上に大諸侯兼る本意を表し居候國々へ此段被 仰達候
 は、可然事に奉存候

關東におゐて與夷人相談條約相極候上にて使を以て御役人に向如此御心
 得可被成杯と申候無法之致方實に 國家を輕侮致候のみならず賣國と申
 答を犯し候事は申に及はす東人醉夢中の故と奉存候

古昔より世代 帝王之興亡を考へ見候へは歴々と明白の次第に御座候何
 れにても亡ひ候軌轍は何分其身奢淫を長し政事をかへり見不申か又は人
 を殺ふ事をたしむ人命を土芥に致し候か又は女主之淫亂により候か又は

幼主之冲味に乘し候跋扈之臣下有之候かこれとても大抵一代二代にても
ち直し候も間々有之候何れ天下人心はなれ候上之事に御座候今國家世々
聖主相つゝき殊に近代明哲之 主に益儉挹恭肅祭祀禮典に怠り玉ふ事
無之毫釐之御かげ不被爲萬民之瞻仰同一體に相見候處如此大事を成し出
し候兇逆之至その辜不可遁儀と奉存候古人之長大息切齒扼腕慷慨歎息之
場あひに遇候大厄の秋と奉存候

古來歴史多き事に候内先史記魯仲連力傳なども能考へ合せ候に似より候
か當時接壤候中國同列之諸侯なれとも秦は首切を貴ひ禮法をすてたる國
なりとて秦を帝とし候計をやふり候その一言にて攻たる敵も退き候ほと
の人の意氣精神には感するものに御座候當時魯連ほとの人無之候とても
海外蠻夷之突如と來候て虚喝の言に畏縮いたし禮待應接奔走に暇あらず
その願指奴使を甘し恬然として奏聞をいたすのみならず天下萬世に恥辱
をおくり赫々たる神國を一漁落販叢にひとしく心得候いかなる狂妄の徒

ひに候哉不可解の一事に候はすや誠に 赫然震怒之時に御宥貸に過候と
傍觀に奉存候

醉人之吉隻語半説にゝも御とり上被成夷人を國中にのこし候ては誠に々
々計に成り不申候賄賂公行□□り自然免れかたく候元來國家一大事に
正面忠誠に出候事なれば賄賂を須ひ候半や此處にゝ自心にも不調法を慚
ところ見へすき候英夷襲來と申は虚喝第一の口實にて必定無之事と奉存
候若眞に西洋諸夷一同に垂涎にゝ不奪は不厭と申心底に相違も無之所詮
國力の給し不申事に候はゝ是誠に天時之至候事にて萬民國に殉ふ外は無
之候前文申候事
聖明之世にあたり可有事にゝは無之候

四 米國通辨官等淺草觀音參詣の風聞書

安政五年三月

一亞人實は三月五日條約調判之趣に付堀田歸府迄と申延置候儀之様子に

る掛之もの大困り之由に候此節使節通辯官所々々出掛申候去十六日淺草觀音參詣花見かてらに參る事に可有之藏前通り見物人夥敷群集爪も立ぬ程に御座候黒船町かや寺晝休夫々歩行に觀音へ參り申候私儀も參り見及び申候雷門も入候程をめて人を入れ不申候折々人を計り出入爲致候事に候處境内奥山迄廣き所中々夥敷群集に御座候貝細工生き人形等の見世物夫々花屋敷へ參り見物休息なしに罷越候様子御座候中々寄付候事も難出來下田奉行手付のもの町方與力同心手先等召連大勢警固淺草町及名主等も惣出に大騒きの事に御座候又十八日には本郷通り飛鳥山王子邊へ遊行是又通行筋大群集致し候趣に御座候其後掛り御役人宅々へも春の年始の後に掛申候由

一阿蘭陀領事官去る十日江戸着愛宕下眞福寺旅宿に御座候然る處翌十一日通辯官早速馬にて罷越候由是は使節之使之様子に相聞候翌十二日には領事官亞人之旅宿蕃書調所へ參候由駕籠を釣らせ歩行之由衣装等

は立派に亦是も見物人群集致し候趣に御座候廿日には領事官淺草觀音參詣亞人之時之通是も見物人夥敷候雷門内床見世にても遊ひ物錦繪等澤山相求申候凡代價金にて十八兩金之品に御座候觀音へも亞人同様さん物金五百疋上げ候由に御座候奥山見物も亞人之時之通矢張門跡前か下谷三味線堀へ出通り筋歸宿之由然るに歸宿後亞人を客に招き有之晝八ツ半下りか夜九ツ時比に歸宿之由下田手附のもの附添參り候事に私知る人杯は歸宅八ツ時比に相成候由翌朝參り候處まだ寢て居る處へ參り待居候て様子承り申候此程は條約の催促今日云か明日云かと掛りひやくものにて何ても言通りに出歩行も致させ候由角力を見申度杯も申出し此程回向院に亦興行中に付別に催さず一日右場所へ案内致し見せ候積に相成候趣昨日承り申候大方明日か明後日天氣次第爲見候積りに相聞候也

五 米使來朝に付觸達書案

安政五年四月七日

御觸案

亞米利加使節の用向有之近々下田表の同國軍艦渡來可仕由に付其節使節同港迄出張用向可相辨處未此地御用濟にも不相成病後長途之往復海路及難儀候間下田港の軍艦渡來致し候は、於近海對話致し度旨相願候に付浦賀の武州本牧邊迄之内の呼寄碇泊爲致下田奉行支配向之者等附添使節右場所の罷越夫々用向爲相辨候積尤用向辨次第軍艦は直に出帆致し使節は猶蕃書調所旅館へ立戻候筈に候

右海岸地先領分知行有之面々相心得居可申候右に付別段固人數等差出に不及候事

松平隱岐守へ御達案

別紙之通相達候間得其意別段固人數等相増候に不及軍艦碇泊之最寄の晝

夜番船二艘つゝ可被差出候事

六 米艦渡來の件其他

安政五年三・四月

一極秘密申上候亞米利加人本國軍艦近々渡來直に神奈川の乗入候積之由然處當三月五日條約調判致し候期に付彼國にては調差支居候事は不存候間相濟候義と心得乗込候事と御座候由此方に於彼是を申候ても此方之差支にて延引致し居候儀故先方にて更に頓着不仕乗込候由左候は此節之京都之御模様へ對し何分相濟不申に付使節病後未得と無之候に付下田迄罷越候事難儀に付近海の呼對話仕度と相願候趣に取扱則別番之通觸出し候積り之由内評取極申候由全京都之申譯の如く尤らしく拵候積りに候へ共御地に於是を御覽せられ候は少しも尤とは思召ましくと奉存候

奥御右筆

早川庄次郎

右京都爲御用被差遣急御暇に三朝出立候事

但岩瀬肥後守急御用に罷下候趣に三日には御役人中之御退出夜に入候趣に殿中も内々混雜之様子をほのかに相聞申候也
前文之一條筆談に及難き意味にて内實は御老中堀田への使に參り候事に御座候是は誠に秘談に候也

○
一使節病氣は疾く全快に先便にも申上候通り所々遊歩昨五日は相撲見物之日に候大方無滞相濟候儀と存候是も最初は自分之用に見物致し候積り之處使節相撲望に候て爲見可遣との事に上之御入用に見物見せ被下候事に相成申候和蘭領事官も一同に見物仕候由に御座候
但相撲一ケ日金百十四兩程之處段々取調金百三兩三步位に減し付候

由に御座候

○
一領事官去朔日登城拜禮無滞相濟申候段々御取扱振ねたり出し亞人之節之通に相成申候併御小直衣之處熨斗目御半袴に相成候由外は大體亞人之通に御座候由
右四丁内々借三條四月下旬

七 大坂城代土屋采女正より林大學頭等への進

達書 安政五年二月廿四日

安政五年戊午二月林大學頭津田半三郎兵庫開港可致地所見分に罷下候節大坂にて兩人御城代土屋采女正役亭に被出候處土屋侯被渡候書付
午二月廿四日林大學頭津田半三郎に被相渡候書付
亞米利加官吏追々申立候趣其外異國之事情等委細被御申聞御時勢之趣

具に致承知候乍去當地は勿論近海に於て開港相成は不容易儀にて其段は毎度御老中方えも申上置候通第一
皇都御近邊其上諸國產輻湊諸家往來之場所に付御取締に相拘人氣にも差響諸方不融通之基にて往々以の外御不爲の儀出來可申と存候間畿内中國の内海え異國人入込候儀は御嚴禁被仰出候方可然此儀當御役にて土地之事情等も深致勘辨候て彌心配致候間見込之趣無腹藏申述候事

八 米使來朝に付久須美佐渡守見込上申書

安政五年
二月カ

土屋侯々堀田備中守え被差出候書付

亞米利加官吏申立之儀に付今度久須美佐渡守見込之趣申上候書付一通私迄差出候間則進達仕候右は兼々私儀も愚意の趣申上置候通當地之儀は皇都御近邊の儀殊諸國輻湊之要津に付若開港交易等之儀有之候ては當所の人心は勿論往々諸藩之氣受迄に差響其外萬事以の外御不爲の儀出來可

仕と奉存候尤萬一異變船渡來之節取計方之儀に付ては去巳四月中被仰渡候御下知之趣も御座候事故右の心得に罷在候へ共舊冬追々御達御座候亞米利加人申立の趣其外等の事情にては當地にも開港之儀彌相願候趣に相見え申候右體之事にては兼て條約の趣にも相違致し彼等追々賊心の本性を顯候儀と深心配仕候乍去御國法御大變革之御沙汰被仰出候上は今更可申上様も無御座候へ共當表は勿論境兵庫西宮其外都て畿内中國之内海紀淡の要門より内え異國人乗入候儀は猶更嚴重之御禁止被仰付候て可然御儀と奉存候殊に佐渡守心付取調申上候趣夫々尤の筋にて偏に御爲を奉存一己決心遮て申上候段誠精忠の心底感入候儀に御座候間其段入御披見申候何卒厚御賢慮被成下此上御永久萬全の御良策御爲宜御所置御座候様仕度奉存候依て此段申上候以上

林大學頭城代屋敷罷出此度の件々縷々演說被致候へ共只被聞候のみにて何共御申聞なく退出の後右書付旅館へ被遣候其後被罷出候共而會無

之大坂町奉行を頼み人拂面會可被下旨被願候へ共人拂して對面する用事も有ましく私存書付を以申入候通外に用なしとて御逢不被成又候右の譯柄にては御爲に宜かるましく大學頭より申送られ候へは御城代の御役大坂に罪を待つ私し身を捨て國恩を報する覺悟也國家の御爲且又支配仕土地にあしきを不申上候は不忠之至私は如何様嚴命を蒙とも私を顧る心更無之御答ありし由京都門人と成し儒者池内大學も附下り居右の趣を公用人大久保要人より申込貫候積にて參られしか要人事の外大學を叱り貴公は官家の人に勅許もなきに兵庫見分とは如何の心得今日御頼の條不得其意京都住居の儒者には不似合と被申閉口の由し

九 米使來朝に付宸翰

安政五年五月十日

五 十 殿下へ賜於八景間兩役へ拜見 叡慮宸筆
墨夷一件に付從關東未否哉不申趣不分明乍彌拒絕之上は墨夷同盟之諸

蠻一同來襲之儀難測間敷嚴重之防禦備度事

彼是實に天下國家之安危存亡此時と實に悲歎無限事依之精々 神明佛陀之加護祈請第一且當時從關東も武備不整之義申越候間何卒嚴重に武備出來候之萬一諸蠻開兵端候共其期不覺之防禦候様致度事如是不容易時節柄未不開兵端共戰爭中之儀を以て於 宮中も晴之公事褻之儀等を不論萬事自今限年數五六年格別省略に専武備用害之一助に可充事

但神事佛事如前件 天下之祈禱なれば難停是迄通可然哉之事

備中守歸府定之於關東も衆議可有乍甚不安心以何様之模様に成候も難測方々格別之譯柄に前文之儀兩役談合に早々所司代に可申達事
但兩役趣意も銘々可有之各評議之上所存書早々可入覽

午四月廿二日

松平越前守御暇年には候へ共當年は御暇被下間敷候

○

廿四日

亞墨^{理カ}軍加使節通辯官備中守宅に罷越候事

一〇 惣登城にて幕府達書

安政五年四月廿五日

廿五日

惣登城四ツ時揃被 仰出候書付

先年神奈川并下田において取結候亞墨利加國條約之趣は具に 京都に被 仰進候へ共此度之儀は不容易御變革に付各存寄をも御尋被遊衆議御参考之上條約爲御取替之方に御決着別段御使を以て 叡慮御伺に相成候處別紙之通 勅答被 仰出候素分戰爭之 叡慮は不被爲在趣に候

へ共方今萬國形勢一變之折柄御所置之次第に寄候へは忽仇讐之姿に相成全國之大事に及國家之御爲不相成可奉休 宸襟期も被爲在間敷候に付先般京都に被 仰立之外御扱方無之と思召候且今度衆議被 聞召度と之儀は既に昨年來各存寄御尋之上之儀には候へ共 勅諭之趣も有之候間尙篤と勘辨致し各存意之趣早々可被申立候事 但萬石以上之面々於席々備中守達之掃部頭老中列座し在國之面々は 備中守宅に家來呼達之

○

御役替 西丸御留主居

川路左衛門尉

一一 幕府達書寫

安政五年四月廿五日

昨廿四日備中守宅に使節呼寄追々及談判候條約之趣方今直に難取計次第は兼る申聞置候通兎角人心折合兼候儀候於京都も深被惱

叡慮之趣等委細及說得候處右様之儀は萬國一體之振合史書にも及見候儀無之雙方談判濟之上國內人心之居合旁等を以差止め候儀は萬國決而無之筈江戸政府に右調印出來不致候は權有之方へ罷出談判可致箇様之儀西洋各國へ相響候は、向後外國之もの條約等之儀に付るは必江戸に罷出直に京都に罷出左様之儀に於ては此後江戸政府において種々之御難を生し候儀は見貫罷在候備中守の沙汰之趣に於ては此上いつと申際限も無之候間いつれにも期限差定候決答受度旨申聞候間猶委細之事情は一兩日中掛役々可申聞旨申諭候事

右午四月廿五日御達

一二 假條約の件大廣間詰及帝鑑間詰の意見

安政五年

大廣間一同

朝廷は餘り強過幕府之說餘り弱過中義にて假條約之條相削可然趣言上

之族連名にて可差出相談有之候處長州細川不同意連名は斷一名に差出候由

上杉遵奉 叡慮御座候様御答有之備前は昨年差出候に付最早不差出候由御答有之候由

帝鑑之間

酒井左衛門尉尊奉 朝廷之說申上候由

一越前彦根人望有之甚當にいたし居候處とうか大交易之說にて土州立花も引込れ候由相聞候利之人を惑候處歎息至極に候

一三 萩藩上書

安政五年五月三日

今般存意申上候様被 仰出奉畏候就るは昨年申上候外格別存付も無之

候へ共 勅答之旨猶御取扱方之達再應勘考之處永世安全被
思召候ては人氣一和之外他事無望と奉存候假令外國之和議相調候共人
氣不和出來候ては不相濟御疎略は無之儀には候へ共此上 叡慮御尊奉
御趣意を以偏に御一和候て 征夷之良策被爲在度奉存候無左候ては内
外之憂患差發振立至何共恐入候次第に候此段厚御所置有之度儀と奉存
候

右安政五年 月 日

長州 上書

一四 幕役交替

安政五年五・六月

午五月廿四日役替

清水御附 江戸町奉行 跡部 甲斐守 町奉行 御勘定奉行 石谷 因幡守
御勘定奉行 小普請奉行 佐々木 信濃守 御留主居 清水御附 稻生 出羽守
禁裏御附 駿府町奉行 大久保 右近將監 駿府町奉行 御目付 鵜殿 民部少輔

同六月五日

小普請奉行 京都町奉行 淺野 和泉守 京町奉行 浦賀奉行 小笠原 長門守
浦賀奉行 御先手火付盜賊方兼 坂井 右近
御養君様御用掛於 御前被爲 仰付候
御老中 堀田 備中守 若年寄 遠藤 但馬守 御留主居 加藤 伯耆守
御目付 津田 半三郎 駒井 左京 御使番 河田 榮三郎

一五 時勢風聞

安政五年六月六日

五月兩度貴簡追々相達御壯榮 不分明 賀 京師御警衛御手薄にては追々公武御
隔意之本と可相成奉存候此表にても有志之士は甚以御案し申候事に御座
候乍然此節之勢にては行々逆も萬全之見詰は無之と窃に御案し申候扱又
先達官吏下田へ歸候上スクウ子ル船拜借相願候付八丈島に參候迎萬一本
國軍艦へ通し大坂に乘入候ては大事と存候て御所置方之儀愚存内々申上

候處右願は不相叶相止申候由夫共表向相止内々拜借等之儀は不相知候へ共先右に付ては何事も有之間敷奉存候へ共御用心は肝要と奉存候一諸侯建白之儀外様御譜代皆上の鼻氣計伺候間色々手を入れ言さぬ工面計致候に付皆役に立不申しかし是等如何様にても格別得失に拘り候程之儀は無之唯國家計に候處是は中には直言可致様も有之候處越前は西儲申立妨に相成候迎激論無之様被成候て終に連名にて差出候に相決候由赤心御尋に連名と申候は餘り之事故去る國家之家老有志之人に御座候間段々議論致し見候處同人申候には連名とて正論を排し候譯は無之京師之御趣意餘り強に失し候間五分相減候様相願關東之御趣意も餘り弱きに失候間五分増候て墨へ掛合直し可然と申説之由老拙申には夫は朝廷御説を得と御吞込不被成と申ものにて京師にても何も直に鎖國と被仰候事には無之行々御安心無之に付御安心相成候様衆議を盡し可申との御事と相見申候間少しも御無理成儀も無之御強過被成と申處も

無之穩成 思召に御座候夫故何處迄も衆議をこらし後々危き條を以て官吏へ申諭し精力を盡し掛合候者たとひ右之内二三ヶ條相減候共可然候へ共初め力も不盡内々五分と相定候ては關東之趣意を相立置京師を押付候に相當不相濟候間何處迄も 勅答に御遵奉官吏之精々御申諭後患に可相成候條御止奉安 叡慮候思召御肝要と御申立に無之ては相成間敷と申候處至極尤に候へ共最早差出仕廻候間致方無之と申事に殘念之至御座候

一唯右連名に乗不申は長州細川計にて外にも別段之議論差出候ものも内々は承り候へ共駈と相分り不申候兩酒井其外五六萬石以上にも少々は正論差出候分も有之かと相聞候
一下々一體之人情は 朝旨を押斥候は不相濟事と議論沸騰致し候
一尾公は何處迄も御正論是非 朝旨を御建被成候様にとてたとひ身に禍來るとても此説は不改と被仰候由御上書も一旦御取戻に相成御書直し

被遊候様閣老を御頼申候へ共決して御承知無之又候其儘御差出に相成候
と申尊に御座候越前を建儲説を同様申立吳候様御頼之處
朝旨さへ奉候時は夫も必ず行れ申候間別段申に不及と御断之由然る處
先月比の追々南紀建儲之説盛に相成候に付幼主を建候は權臣權を專に
し私之説を通し京師を押付候積と被心付先月十五日頃の一橋之儀を嚴
敷被申立候へ共閣老品能受候計にて一向取合不申形勢之由
一松殿には何處迄も正論 朝旨御遵奉に思召候由是は却て手に入兼候間
其内手に入候は、御廻し可申候へ共是等可相成は三殿を直に御内々御
尋被遊候様仕度ものに御座候
一新中殿には誠に困り候事にて初めは正論に候處閣老を御差戻に相成又
候邪議に書直し御差出に可相成思召に付御家老始皆々御諫申候へ共御
用無之松殿にも被成方無之候
一右之通正議出候へ共權臣を差戻爲書直候勢故正議は追々相減申候勢窃

に恐惕致候

一當時にては堀岩杯は 京師之御様子も存居候間却ち 朝旨を丸潰しに
致候ては逆も不落付と申候處上田一人にて權を專にし此方見込通に取
計仕置京都へ届切にて宜敷杯と申候由
一林も邪説を唱へ 朝旨を奉し是は幕威捨り候杯と申候に付若老以上之
人々學者か左様申候間其道理なるへしと申候もの多き由
一上田か林か不存知候へ共やかましく申候は伊せの神主に仕て仕舞へ杯
とけしからぬ恐多き事を申候由戲にも致せ餘り之事と承り候もの切齒
致居候是は俗人にてあきれ居候
一彦根之正邪探索致候様被仰遣候處是も上田と引組高松と心易く一橋を
拒み候仲ケ間故定て邪論と存候總て南紀之幼弱を利と致候者權臣之存
寄を建候見にて表向は 朝旨を奉し候様成事を申候ても詰りアメリカ
最負にて 京師を押潰し候説に相成候間油断は不相成候乍^本□□人京師

に居候和學者長野主馬と申者召抱此者奔走致候間京師を九潰しに致し候は不同意可有之と申者も有之候此長野と申もの先達て急に上京致し江戸表之評判にては上方を邪議に拵に參候と申候如何其者之御様子御探索可被下候歸り不申久敷京師に居諸公卿へも御出入致候者の由に付是を能々御説得彥根に力を盡させ上田を却遣候御策も無之哉何分御工夫可被下候

一西儲之儀此間御養君御用掛り申御役人大勢出來申候處唯御筋目を御撰ひと申計にて誰と申事出不申候間表向にては一橋と取沙汰致候へとも内實は南紀と多分相極り候模樣に相聞越前は大に力を落し弓折れ矢盡き致方無之と弱り居候様子に御座候又承り候に肥前家老水野の聲藥師寺筑前と申旗本我か策行れ候と手を打て喜ひ居候由に付實は南紀に相定り衆意を恐れ隠し置俄に支度出來之上相發候積可有之と申沙汰に御座候若右之通南紀の幼弱を利として建候位にては權臣見込之通京師を

丸潰し被致候策行れ可申と志士は甚危み居申候右故色々力を盡し候へ共行届候哉否之處相分兼候越前は交易説不宜候へ共西儲之儀には實に力を用ひ居候西儲一橋に相成候へは京師御趣意相立候様相成候は必定に付少々の見込違は宜候間此説にても行れ候様にと存候處右定て御前相願直に上へ出候様可致も難計とて決て御目通相願候ても不取次様上田之豫め防ぎ候由姦物之手之廻るにはあきれ果申候左様候へは此上は京師之御助力の外致方無之と被存候

三様には兼て大老へ御文通も有之由に付此節幼弱之者立候様にては專權を心掛天下之御爲をはからざるに相當り自分爲にも不相成候間諸有司は何と申候ても大老の權を以て押切一橋を建可申と御沙汰有之長野へも其趣能々御申諭有之是等能御用心無之と機密關東尾公へは近衛様之是非一橋に御定無之は關東之御爲不宜思召候事嚴敷被仰遣此兩公にて骨を折被申候者多分事行れ可申尾公は無理斷骨折にて候へ共京師之

御意氣かゝり候者尙更盡力可有之と被存候たとひ夫計にて行れ不申候共兩公力を入被申候へは必日數は延ひ可申其内に 勅使にても下向駈と御定相成候は、可然哉に奉存候十八日比には表向出候と噂も有之候間右書通之件御急き不被下候ては間に合不申候右には日延之内 勅使御下向に候ても右の猶又 勅答之趣を以て御責め一橋御定有之候様御沙汰有之候は、相行れ候者必定と奉存候萬一表向被仰出候後にては迎も挽回相成兼候又是か行れ兼南紀と相成候へは必 京師を押付直に條約と相成候は必然に候有志之士氣を揉候事に御座候

一西儲一條御内 勅有之候趣は少々は存知候ものも有之候へ共押かくし置候と相見しらぬもの多き様子此間御勘定奉行佐々木信州の説に頻に京都紀州々と申來候定て紀州に可相成と心易きものへ咄之由承り申候一關東何と申上候共御腰ぬけ不申様に御押張被成候へは御助け申もの必多く幕府の有司も弱り候て動き可申候也若御弱みを御見せ被成候へ

は必押潰し候に掛り可申萬々一左様相成候ては以後 王威御取戻相成兼候

一佐倉岩瀬杯歸り後 京師之御趣意少しにても立て不申候ては治り不申と申候處上田一人にて申張初 京師へ申さぬ方宜と申候處生中伺候に付如此相成候と申候故此人にて權を執候様相成候と承申候

一諸司代此度被召候是は何れ□滴と申事に御座候惡敷ければ隱居なれ共高松の弟にて高松當時大に口をき、候間拵へ付候て溜格位に相成かも不相知と評判仕候何失火之事に付ての答と相聞へ其素にては如何之評判に候哉其代に酒井若狹守再 勅と申候上之御使初大老へ被談候處一旦歸り後家來不承知にて斷に相成又龍野へ談候處是又嚴敷斷に付無據若州へ談に相成若州再勤にて登りかけ右御返答も兼て被登候と噂致申候如何御座候哉しかとは不相分猶近々可申上候何分兩公より大老と尾州へも御文通出來候は御いそぎ可被下候草々以上

六月六日

一六 珍説

安政五年七月二日

五年午七月二日 但方出飯泉友輔珍説

佐倉侯歸府後色々風説之内に今度は誰か上京なるへしといふに讃州侯と申説なり當年末暇年なれとも未滞府被 仰付は其爲と申事ながら又彦根なりといふに御大老の御使に參る事はあるましく若州侯なるへしといふは長く所司代を勤て京師に受もよき方と承りければ是等相當の説ならんといふいやな候ては又咄しも新らしく成いふもの故矢張先々の手續にて佐倉侯なるへしと様々氣をもみて小田原評定なる内に去月廿四日岡崎の家來木多ミの守龍野の亭に被 召呼去る十九日御奉書出府被 仰付候旨心得として御達有之趣御兩 其外夫々に御吹聴ありし事速に傳へ承りぬされはいかなる御用召ならんといふに様々の説の内に溜格

といふ説あり又無程御養君被 仰出に付西丸御老中といふ説あり又御勝手六かしく御勤續なり兼無據御内願にて御役御免といふ説ありて評判込になる處或人云今度岡崎の御召有御役替にて無之矢張當春の一條の事の由御三家以下諸大名の衆議被 聞召度との儀に付席々存寄御尋之御答書其外不殘纏めて所司代に相渡言上に及ふとの御評議夫々立り出府と申事に承り候やといへは又或人いかにも密々承りけるにアメモ一條 叡慮伺として老中態々役々引連れ上京致したるか一體間違也夫か爲に所司代もあり傳奏もありければ時勢無據御變革被遊之旨示しの由を入 叡聞候様所司代を以兩卿へ御達候は可然儀を事々敷伺立いたし候に付彼是と事六かしく相成り不容易と之御事にて素より不容易事故五六年以來評議に評議を詰めて御警衛其外品々御變革被成候儀之處陸々むけも御存無之公卿堂上迄内々騒立候事抔も有之由にて遂に先般の如く 勅答被 仰瑁明ぬ事にて小供の使に參たも同様の御あしらいに

付又候上京致しなは尙更御難題可被仰出間わさく上京に不及諸家の
上表其外引つからめて次飛脚を以所司代へ遣し夫々傳奏を以言上致
し是非共御許容可有之左も無之ては一時戦争に相成奉安宸襟候事難
相成候間此段得と御勘考有之度旨申上候積り之由然るに彦根侯夫は餘
り御不敬に可宜かるましくと色々議論有之といへとも上田侯勢ひに可
佐倉も關宿も不及仍可漸々次飛脚を止めて岡崎を呼下し委細を是に託
して言上せん事になり候事と承るさてく驚入たる御評定なり彌實説
ならば公武御不和之基とも可相成不容易事に付程能御和議有之候様い
たし度事に候也

午七月七日

久に借寫

一七 關白より幕府へ可達呈書草稿

安政五年

一墨夷之事關東御所御厚配之程察 思召候寔以世界之形勢一變いかへと

も被遊方なき儀に候へとも當御代に至り古來未曾有之和親被相始候儀
は實に 神國の御恥辱 御瑕瑾實誠に以 皇太神宮武帝已來御先代へ被
奉對何とも被 仰譯方無之儀と 思召晝夜御愁歎之御儀臣下之輩不堪
恐懼御事共に實には通商も何卒一切御拒絶に相成候様被遊度 思召候
得共嘉永已來追々關東所置之次第も被爲在候儀故先當時之處はせめて
下田條約になりとも引戻しに相成候追々拒絶候様被遊度 叡慮に候尤
蠻夷同盟にも有之不容易儀は御深察の御事に候へとも何卒公武御合體
にて御國體不損様との 叡念を以て大樹公格別之御雄斷洗滌之御所置
幾重にも御頼思召候

一何分外國の覬覦之時節に付 伊勢兩大神宮并三種之神器御守護之事深
被惱 叡慮候間何卒國持大祿之大名兩三輩つゝ爲土着右御警衛之儀早
々御沙汰之儀御頼被遊候
一至大之事件に付何卒大樹公御上洛

主上御直談被遊度御内慮に被爲在候へとも御上洛も御六ヶ敷候歟三家
御家門越州阿方之類州之類に在りも兩三輩か京に○難相成候様國家之大事に候間於
朝廷何卒十分の御評議を被盡度思召候

一何卒國體不汚様格別之御祈願被爲在度候間伊勢公卿 勅使被奉度并山
陵へも 勅使被奉置候 叡願に候如何可有之哉大樹公へ御相談被遊候
一赤心報國之趣意に候得共京都之人氣頗不穩寺社の輩も彼是所意申出候
間何分にも一先御歸京之上 叡慮之邊得と御熟考之上被安 叡慮人氣
も納得し静り候様早々御返答御座候様御取計頼入候
右殿下臺命にて以演舌堀田へ可申聞被命三十六口上書書付る處又是
も止になる

一八 異船渡來に關する書翰 二通

安政五年六月十八日

五年午年

一異國船之儀いまた駭と風説承り込不申候尤昨日早速爲探索組之者追々
出坂申付有之候へ共今朝駭と相分不申しかし只今にも何とか可申越
儀と奉存候昨夜風説之趣に在りは十五日夕相見追々乘込熊野日高之間に
相申候由紀州岸和田の浦觸有之固人數手配有之候由岸和田凡十五
六里沖合に相見候由英船にて十八艘程渡來之由申之候眞偽打混候説に
も可有之哉と心配仕候少しも模様相分次第可申上候へ共可相成は今晝
後御使之序御差向被下度候

六月十八日

一異船之儀追々相糺候處右船は紀州沖合に相見候儀は相違無之候處全通
航之船にて帆影相見不申由風説御座候尤右に付在りは艘數等は悉偽評と
相見申全此節長崎へ渡來之亞船類艦に可有之哉之由に御座候左様御承
知可被下候大坂表は市中平穩に在り奉行所限り之風説之由に御座候尤右

之手續委細相分候は、尙早々可申上候へ共右は御安心筋之儀に付早々
此段申上候以上

六月十八日 未刻返答申來

一九 公武合體云々書翰 安政五年八月八日

先般墨夷假條約無餘儀次第に於神奈川調印使節に被渡候處猶又委細間
部下總守上京被及言上之趣候へ共先達に 勅答諸大名衆議被 聞召度被
仰出候詮も無之誠 皇國重大之儀調印之後言上大樹公 叡慮御伺之御趣
意も不相立尤 勅答之御次第に相背輕卒之取計大樹公賢明之處有司心得
如何と御不審被 思召候右様之次第に於蠻夷之儀は暫差置方今御國內
之治亂如何と更に被惱 叡慮候何卒 公武御實情を被盡御合體永久安全
之様にと偏被 思召候三家或大老上京被 仰出候處水戸尾張兩家慎中之
趣被 聞食且又其餘之宗室之向々も同様御沙汰之由も被 聞食及右は何

等之罪狀に候哉難被計候へ共柳營羽翼之面々當今外夷追々入津不容易之
時節既に人心之歸向にも可相拘旁被惱 宸衷候兼る三家以下諸大名衆議
被聞召度被 仰出候は全永世 公武御合體に於被安 叡慮候様被 思召
候儀外慮計之儀にも無之内憂有之候へは殊更深被惱
宸襟候彼是國家之大事に候間大老閣老其他三家三卿家門列藩外様譜代共
一同群議評定有之誠忠之心を以得と相正し國內治平 公武御合體彌御長
久之様徳川家を扶助有之内を整外夷之侮を不受様にと被 思召候早々可
致商議

勅諭之事

八月八日

添書

別紙御沙汰之趣尋常之御事に候へは御斟酌之御次第も被爲在候へ共何分
蠻夷之事件に於關東も大改革之御時節に候へは萬一此上

公武御隔心ケ間敷儀有之候亦は甚以被惱
叡慮候間格別之儀を以て無御隔意被 仰進候間此段不惡御聞取に相成候
様被遊度 御沙汰之事

今度被 仰進候趣三家始相心得候様別段水戸中納言へ被 仰下候此段
御心得之爲申入候事

八月八日

右一帯 大老閣老

二〇 御口上帳面

安政五年八月八日

勅諭之趣被 仰進候右は國家之大事は勿論徳川家を御扶助之 思召に候
間僉議在之 御安全之様可有勘考旨以出格之 思召被 仰出候間猶同列
之方々三卿家門之衆以上隠居に至迄列藩一同にも 御趣意相心得候様向
々へも傳達可有之被 仰出候以上

八月八日

右一帯水戸中納言の添書

二一 公卿存意書

七通 安政五年正月十五日

安政五年正月十五日

左 大臣 殿 右 大臣 殿 内 大臣 殿

左 大 將 殿 二條大納言殿

右四折

御口上

關東え亞墨利加の申立之趣御回覽に相成候間御所意之處御書取に亦來廿
二日廿三日之中傳奏衆え被付候様兩卿が被申上候趣に亦左府様が御傳達
に付右御順達被成候尤御書付類御回留が傳奏衆へ御返却可被爲在候事

帳面 三冊 御口上書 二通

右府殿御使

牧主計頭

右切紙

亞墨利加使節に及應接候趣且右に付使節差出候書付和解追々申立之趣
 不容易事共に付御勘考被爲在候處近來世界之形勢一變致し唐土之昔戰
 國之世七雄四方に立分れ居候姿に御當國に於も已に外國と條約御取
 結御交通被爲在候上は古來之御制度に而已被爲泥候は御國形御挽回
 期無之日夜御心を被爲惱候御儀に有之併非常之切は非常之時に無之
 は難成中興之御大業を被爲立御國威御更張之機會も亦此時に有之候間
 御大變革被爲在度思召候へ共當時御國內人心之居合方も有之人心不居
 合節は内外何様之禍端を引出可申も難計候間先使節申立之趣近々應接
 之上可成丈被取縮候筈に候得共爲御心得御兩卿へ御達可申旨年寄共申
 越候事

十二月

右切紙是は林津田上着前に差登す

上包 申上書

林 大學頭

津田 半三郎

切紙

十二月廿九日申上候趣大意箇條書

巳十二月廿九日
 成日長傳
 於所司代
 宅會林代
 田兩上人申
 口上也也
 述津

一此度私共兩人上京仕候儀は是迄外夷之御所置都度々々に書面を以被仰
 進候へ共書通のみにては盡し難く且今度亞墨利加更申立候に付は別
 事事實巨細に申上候様被仰付候事
 一四五十年以來萬國之形勢一變仕各國貿易を專一といたし候に付御國を
 も諸藩同様鎖國を開き度使節差越可申旨歐羅巴諸洲にてさま／＼評議
 有之終に亞墨利加國魁首と成ペルリ第三度之人撰にて若和議整はさる
 時は戦争と覺悟を究め渡來いたし候事

但右はレヒソレヤツパン并ペルリ日本紀行等之書舶來に付翻譯致し
ヘルリ渡來之發端此節に至り相分り候事

一丑年七月ヘルリ相州浦賀表に渡來兼之見込は江戸表へ乗込和戰之内
を決定可仕處本國之軍艦遅々に付大統領之書翰差置浦賀近海測量い
たし相歸り候事

一寅年正月再び浦賀表へ渡來仕彌戰力を盡し候積りに香港に軍艦九
艘を調ひ大炮用意いたし武州神奈川海へ乗込候に付横濱にて應接相成
其節御國出張之諸役人は勿論諸家御固之人數いつれも必死を究め戰爭
之覺悟に付兩國之殺氣其前切迫にいたり候處數度之應接により雙方之
事情相通し終に和親條約取結猶又五月下田におゐて條約追加爲取替候
事

一異船御所置之儀何角批評仕候向々も有之候へ共強御柔順之御取扱の
みに無之既に前文戰爭一段に相成候處萬國時勢御勘考之上専ら理世安

民を被思召候事

一條約相濟十八ヶ月之後下田の官吏可差置約定に付辰年七月亞國官吏ハ
ルリスと申者渡來國書持參重大之事件言上仕度慶長之比ホルトカル登
城御目見仕候事とも申立江戸出府懇願に付昨年以來數回應接有之候事
但其外下田遊歩下田箱館へ亞國商人差置度種々之事件應接有之候事
一當巳年に到り條約之廉々被爲對出府登城相濟其後十二月四日官吏箇條
書を以ミニストル并貿易開港等之事申上奉願候へ共右之中御取捨之上
御許容可有之積り乍去是迄邊海に欠乏品被下候とは譯柄違ひ時勢御
斟酌有之御變革之御所置に相成候に付委細不被仰上候は不相成事
但十月廿一日官吏江戸表に
出府差出候書翰并口上和解同廿六日對話
書十一月六日應接書此度之箇條書に願意之趣具に有之右は關東の御
回し相成候事と奉存候

一開港之儀官吏十港と申立候へ共減少之積り其外開市之儀京都表之御事

は關東にあり同心配仕右は申上候迄に無之御許無之江戸表に御引受
江戸近所に開港開市いたし漫りに雜居は不致候様厚く御配慮有之御取
締旋と付け京都之御儀はいつれにも御安慮之様力を盡し差拒み候心得
之事

一方今海外之時勢改候に到り候は寛永以來之御舊制に候へ共鎖國之御
法は御改め有之萬國に程克御附合無之候は相成間敷亞國其外にも
一國との戦争に候へは御勝利も可有之候へ共彼國同盟之國々諸港へ代
るゝ軍艦渡來仕候は御勝利有之候共御國は疲弊可仕且清國にも
一端戦争開け候より今以外寇内亂とも平治不仕候次第に付外國之御所
置は寛永以前に御立戻り御座候方當節之時勢に相叶可申既に寛永以前
は外國商船往來は勿論江戸表に夷人被差置候儀も有之候事
右之外蝦夷地之事魯西亞人之事亞人手を引候は英夷必渡來可仕事萬
國之形勢同盟之事諸蕃航海盛に仕候件々申上候右に付御不審に被思召

候條々は御尋次第猶又可申上候以上

十二月

林 大學頭

津田半三郎

別紙御口上書之趣右府様へ御傳達に付御順達被成候事

内府殿御使

柳田柰少允

右桃花御到來翌日二條家へ御傳達三冊之寫在後

安政五戊午年正月廿六日有 召依風邪不參之處入夜家信卿入來兩役列座
武傳光成 傳 宣亞墨利加國申立之儀關東言上に付在官參議以上所存被尋
下以一封今月中可言上尤光成卿へ可附由被示云々依多人數大納言中納言
三木等第一□へ被示由也

亞墨利加使節へ及應接候趣且右に付使節差出候書付和解追々申立之趣
不容易事共に付御勘考被爲在候處近來世界之形勢一變致し唐土之昔戰
國之世七雄四方に立分れ居候姿に

右一通と

亞墨利加使節差出候書付和解一冊但第六則十二月二日備中宅にて應接

之趣一冊十二月四日使節差出候書付和解一冊但第十六條

右等被渡夫々通達了

廿七日當月中之處堀田上京猶豫に付二月二日中不苦由也光成卿夫々申通
了

二月三日往復十丁

忠 香

近頃異國盟約相整 本朝にも可同盟貿易様夷謀に付亞國魁首として種々

強情申立候旨言上候間所存御尋之由謹奉候誠國家之大事に候間猥言上恐
入候得共愚存申上候先外夷へ和親を被許候儀は 本朝之人心一同之事に
候哉何分當時國內多分武家之所領に成來候間徳川家下知之所には尤同意
と存候へ共三家始大名之面々所意も可有之候間右之面々所意被 聞食候
上何卒 皇威不滅國辱無之様且此上諸夷上陸仕種々之儀申立差支共申述
候節は關東之所置見込も有之候哉兼て得と御尋可被遊哉何分にも國內人
心不一致儀は即公武故障之基に候間人心一同之事に無之候は、御聞届
被爲在間敷儀に存候右に付は於官家も諸臣等議論に可拘人々へは弘く
御評議可被爲在哉尤取捨決斷は

聖慮又は大臣之儀に候へ共如此 皇國之大事は弘く議論之上 御裁判御
宜哉將又自昔蠻夷之異變毎々依 神助平治候間何卒君臣心を一同仕眞實
之御祈請も候は、自然 神明に通候歟と存候事
右正月廿二日以雅樂頭月番廣橋前大納言光成家へ被附中奉書四折同紙を以て封す表忠香の二字封目

緘字也他事の
勅答とは違ふ也

實 良

近頃夷族渡來遮る種々申立候由言上に付所存御尋謹奉存候愚意不顧恐申上候過去之儀は不及是非候へ共此上は 神州之瑕瑾耻辱に不相成萬民納得安心仕候儀專一に存候蠻夷追々國內に來集猛勢廣大に相成種々難題申立候ては彌無致方可相成と甚痛心候何卒唯今之内更に三家始諸大名之面々所意被尋被考合人意一同に相和し候上何れ共被決定候は、聊御安心にも可被爲在候歟人心不一致候ては内外之禍出來と存候深被運 叡慮候樣にと存上候事

右正 廿六 勅問二月二日以 武傳 卿へ被附仕立如父君

實 德

近來異國船度々渡來候に付於關東精々被取鎮候處莫大之所望申立候由言上就中所々開港異國之官吏を置候儀申願候趣意不容易事に候既去弘安之舊蹤も有之候間武家一同一致之上 神國之耻辱無之夷族屈伏候樣 勅詔被爲在專一奉存候事

重 胤

今度墨夷關東登城不容易事條申立林大學頭津田半三郎を以應接次第言上書取之趣誠以一大事

神州之安危此時に候歟四海昇平相續人氣怠慢之折を窺ひ夷狄強梁を申したし既に京攝之内商館を申願候旨何様商館と申候へは輕易にも相聞候へ共彼牛皮の説の如く追々廣大之結構无相違候歟最初下田を被許今又十港開市をも申立候不奪不厭之夷情顯然候又商館を被許候上にて場所相選或は京攝の城郭住居を企其上邪教傳染のほとも難計たとへ不虞之御備とし

て兼て嚴重之警衛を被差置候共且暮 宸襟を被安候時節被爲有間敷と深
恐入候旁以五畿内は申迄もなく近國たりとも夷館免許之儀无之 御安慮
之規則屹度相立候様關東へ被 仰進可然哉存候元來於御政務は東武へ御
倚任之儀一切御構は不被爲在儀に候へ共かゝる急務之大事 皇國の安危
に候へは 公武一同人心歸服否御議定之上人々忠言御採用不拘國體 皇
威萬世迄も光輝候様偏に英斷奉仰候事

今度從關東亞——使節申立之條々不容易内にも諸國要津之浪花に開港
之儀申立殊更於京師夷人連綿居留致度との志願實以恐入候事柄に付併是
等企望之念慮は於關東も斷然拒絕可有之儀とは存候へ共一體使節申立之
趣應接被取縮候關東之趣意にては必竟許容之儀と相聞候上は利欲無飽醜
慮是非共用捨難相成廉も追々強く申立候様に成行候ては應説接も難調次第
に相成左候へは不得止開衅端場所に推移候儀は必然之道理に可有之歟と

存候 度使節申立之件々は許容致間敷并 皇國諸藩之大小名報積年
之仁恩誠心一致勉勵忠勤海岸之防禦運良策可警衛
叡慮之旨列藩之者えも可申聞旨關東へ被 仰達候は、可然存上候事

正月廿九日

隆 祐

忠 能

墨夷申立不容易之條々關東言上に付 御沙汰之趣謹奉候右一件自始之次
第慥に不承及事に候へは猥に言上別々恐入候得共於此儀は兼々深憂懼仕
居候間不願恐言上候元來去嘉永年中渡來呈書條約後於關東追々和親取結
所望に隨順し既に使節登城對面も相濟候上彼是增長種々難題之條目等申
募り候段

皇國を致輕蔑候儀誠以 神州之恥辱國家之安危此時と存候今度條目之内

所々に開港夷の官吏を置き國中を隨意に往反し且彼の教法所を建立之儀
 々と殊更難許儀に候此上は偏に一州之人意一齊和同し蠻夷之姦謀を緩服
 致させ候儀第一と存候間早く武邊三家始諸大名更に格別懇切之示談有之
 上下萬民納得し心を一にして國體を不損失様速に改正之所置可有之由急
 度御沙汰可被爲在候様 聖斷所仰候唯今之内早く改正無之苟且因循候は
 朝廷之御危難は勿論於將軍家も禍害不遠と深歎入存候去嘉永年間の
 條約すら十分の宥許にて當然の儀にも無之歟況増長の今に至り國內の人
 意不一致儀は必定内外禍亂に可相成候方今之時勢人心不居合之趣實情を
 以て一端夷族へ説諭謝絶候儀簡要と存候其謝絶を不聞して彼より兵端を
 開候は是非之論に不及遽に打拂ひ人心一致し防禦の一事に歸し各誠心
 を以て其術を盡候方却て萬代安全之策と存候唯々正路を以て人事を被極
 盡候上は實に 天命之令然る所にして其時こそ 神國之儀天助冥威も必
 可有之候尤争鬪は不容易儀勿論に候へ共面前之理世安民を専とし國家之

深謀遠慮を捨置き此上諸夷追々來集し猛威を張り種々難題申立候ては堂
 々たる 神國終に犬羊と伍をなし國勢長く挽回之期無之候間何卒早被決
 定衆思を集め群慮を同し蠻夷を退け防禦を嚴にして永く夷狄之深害を除
 去り 神州之御瑕瑾に不相成様厚可被廻 叡慮相願上候事

二日中の處依痛所

入魂了

右中奉書四折同上包

二月三日持參附 光成卿

忠能

緘

公 純

口演

御建白御寫被許拜貸候旨薰手再三卷舒誠御精忠之程遠は貴嶺公近は愛
公御祖先にも御超越十目所指感佩難盡筆紙候餘子は碌々不足掛于
齒牙之下官上啓寫別紙屬電覽候誠に優々寛々赧顔之事に候至切令建言
度候へもと觸忌諱令困苦候別段不及御返候乍是上寸忠之程御互奉祈候
書餘屬後鴻候也頓首

二三

公 純

中山殿

追ふ自餘建白も多端にも多分同一體にて今度水戸反復趣意有之候事
なから多年之忠節畫餅に相成と歎息事に候定る深意嫌疑相遁候事と
存候也

二二 元寇紀略拔書

皇朝戰略編
第三
外史同之
細記
元寇紀略
又見蝨蠅抄

宋氏爲元所滅諸隣國皆服於元獨我邦不通使聘元主忽必烈令高麗人致書
於我曰不服則尋兵朝廷欲答之下鎌倉議之執權平時宗以其書辭無禮執爲
不可元主復遣使者趙良弼來時宗令太宰府逐之凡元使至前後六反皆拒不
納文永十一年十月元兵可一萬來攻對馬地頭宗助國死之轉至壹岐守護代
平景隆死之事報六波羅令鎮西諸將赴拒少貳景資力戰射殪虜將劉復享虜
兵亂奔而元主必欲遂初志建治元年元使者杜世忠何文著等九輩至長門留
不去欲必得我報時宗致之鎌倉斬于龍口以上總介北條實政爲鎮西探題遣
東兵衛京師西兵衛者悉從實政益築太宰府水城省冗費充兵備弘安二年元
使周福等復至太宰府復斬之元主聞我再誅使者則憤大發舟師合漢胡高麗
兵凡十萬人以苑文虎將之入寇四年七月抵水城舳舻相銜實政將草野七郎
潛以兵艦二艘邀擊于志賀島斬首虜二千餘級虜列大艦鐵鎖聯之殼弩其上
我兵不得近河野通有奮前矢中其左肘通有益前仆檣架虜艦登之擒虜將王
冠者安達次郎大友藏人踵進終不能上岸収據鷹島時宗遣宇都宮貞綱將兵

援實政未到、閏月大風雷、虜艦敗壞、景資等因奮擊、虜兵伏屍蔽海、可步而行、虜兵十萬、脫歸者纔三人、元不復窺我邊者、時宗之力也、自龜山帝至後宇多帝

二三 詰問關東使

安政五年

詰問關東使

○編者註
本文は第三
號文書と同
文なれ共
書に從ひ
是に收む

於關東隨意に接夷人不經 天裁極條約使夷人散居本地欲置 乘輿於何地且將軍以下極條約之輩亦欲居於何地之計に候哉詳に陳說可致候事

此一問に應酬は濟可申候其所置と申せは速に下田夷人を追出し可申事

若夷人受不申候時は不得止打拂可申事

此一條詰問之上に大諸侯兼本意を表し居候國々へ此段被 仰達候は、可然事に奉存候

關東において與夷人相談條約相極候上にて使を以て御役人に向此比御

心得可被成杯と申候無法之致方實に 國家を輕侮致候のみならず賣國と申咎を犯し候事は申に不及東人醉夢中の故と奉存候

古昔より世代帝王之興亡を考へ見候へは歷々と明白の次第に御座候何れにても亡ひ候軌轍は何分其身奢淫を長し政事をかへり見不申か又は人を殺す事をたしみ民命を土芥に致し候か又は女王之淫亂により候か又は幼主之冲昧に乘し候跋扈之臣下有之かこれとても大抵一代二代にてもち直し候も間々有之候何れ天下人心はなれ候上之事に御座候今國家世々 聖主相つゝき殊に近代明哲之主に益儉挹恭肅祭祀禮典に怠り玉ふ事無之毫釐之御かけ不被爲在萬民之瞻仰同一體に相見候處如此大事を成し出候兇逆之至りその辜不可遁儀と奉存候古人之長大息切齒扼腕慨歎息の場あひに過候大厄の秋と奉存候

古來歴史多き事之内先史記魯仲連か傳なども能考へ合せ候に似より候か當時接壤原末此末不見

二四 池内大學鄙見草案

安政五年正月廿九日

鄙見草案

安政五戊午正 廿九

池内大學奉時

墨夷使節申立候事情切迫に付舊臘林大學頭津田半三郎出京言上猶又爲伺 叡慮追々閣老出京有之候由扱此度之御所置乍恐竊に熟考仕候處何分一々彼申立に隨順いたし數港を開き蕃館を建蕃吏を置勝手に貿易致させ候は、御國內に無賴之姦民追々出來可申耶蘇の邪教も蔓延可仕候所謂蜂蠶を懷袖に藏し虎狼を園庭に養か如し終には手を束ね彼か管轄を受け坐から外夷の屬國となり赫々たる 神州膝を犬羊に屈し 御國勢長挽回の期不可有奉存候何分面前咫尺は無事に似たりと云とも天下の人心不服に候ては内外混亂如何之深害を生し候も難測候今日之事勢中々一人之私智獨見を以て決斷致し候場合には無之候間先關東も使節を彼國へ被遣其動靜虛實を洞察し寅年浦賀應接の通りに引戻し候

様手強く談判致し猶又列侯諸藩之意見を御尋被爲在衆思を集め群慮を同し華夷を別け防禦を嚴にして夷狄の深害を不爲様 聖斷被爲在候儀簡要と奉存候左候は、萬國え被爲對 御國辱にも不相成人心も可致一致候此則理國安民の長策にして徳川家の御爲筋第一と奉存候是非共祖宗之良法に反し大變革を被行候儀に候は、朝廷にも亦當時の事勢御變革被爲在大樹御上洛親く 禁闕を警衛被成關東には速に西城の世子を被定親藩之内可然人を被撰輔翼御座候様被仰出候は、乍恐 宸襟も可被爲安候様奉存候事

二五 時勢風聞書

安政五年正月一三月

一午正月廿一日胤保朝臣内話彼家々來阿北波女關東城中に奉公甲越云舊年來城内女房向にて太平踊りと稱し亂舞流行昨は御臺方之美麗相勝今日は將軍家方相勝と互に衣服等美麗を盡し上分にては鏡を繡模様の内

加ふ依之衣服裝束之用途頗迷惑之旨有書通眞實之事云々

一同内咄舊冬押迫或今年元日と云説もあれと大名登城外夷に和親せられ 皇

國の辱を不被顧之昨十二月廿九日卅日比と云所置不審之由申立堀田老中以下閉口依是一人火急に

上京之風聞有之又井上信濃守以下夷掛之役々追々上京之旨也

一同仙臺舊年俄に己國へ引込江戸屋舖には番人計是自領の地面に天領犬
牙の處有之自關東けんを入るに權柄之次第有之に付其役人を殺し江戸
屋舖を引退よし但夷一件關東所置不得心之故寄左右引込歎と云々

一鍋島三ヶ年稱所勞在國不出府是又夷一條不心得之故云々

一加州知恩院へ依時宜俄に山内借用可被頼儀可有之哉之由兼申來由也

是公役之儀なれば所司代町奉行之命も有へき處無其儀一箇にて直
達の由也眞僞可尋

一正十九舞御覽林大紋着用津田布衣參 内拜見附武家執次之中間に少し

おめり着圓座拜見月花門以爲奏變上京見太平樂心中如何々々

一同日公純卿御内話今日又々自武邊夷族申立書八冊武傳披露と云々

一去年十月廿二日亞國使於城中大樹面會同廿日於老中第一堀田亭又面
談と云々叮嚀のあしらい下乗等は老中同様の場所又老中出迎之由也如
何々々

一二月一日於省中東坊面會同談封事大體國內人意可一致様之儀は各有之

精々説諭不聞時は兵事之外無之於 上も御沙汰之旨也

一同日公純卿内談 上思召同斷兎角鷹司殿父子今一段其邊不同心之氣有之由也忠順卿之封事蠻夷を信醉するの意有之由被見其趣有之尙實萬公と可被談様申合候

一正廿九爲理卿云二月々又々於小御所御法樂如去嘉永七年被 仰出旨也
御目次は被止七夕重陽者被爲在二六月水無瀬宮聖廟は尤可被爲在由也
御懺法後 七日奉行第一予々奉行分配可上由有内話 大奉書の方也

一二月二日酉二剋前地震不微

一二三建通卿内話水戸前中納言從來蠻夷之儀愁歎太閤へも度々打拂等勸

申既先日迄も文通有之處一昨日別早飛脚を以て俄變心之儀申越言語道斷之事也 越前同變改之様子有之由也 依之昨夕公純卿實萬公亭へ被行向内談之處於内府も少有恐改之氣云々如何如何々々 後剋内々一見之處全變意にもあらされ共打拂を主とし申入候へ共登城迄もすむ上は無謂打拂も不宜由甚鈍き文面に是迄の書勢一向无之短札也

二月三日未剋於省中武傳兩卿被招十二月十一日亞米利加使節對話書一井上信濃守岩瀬肥後守此通之 一冊 丁數表紙共廿八丁 被渡此間之公卿次第に可回覽被示二以下八迄追々可被渡由に候事

此一冊唯今自武傳被渡候合八閉有之追々可被渡由に候可及御傳達被示候先日一封注進之上には候へ共爲御心得先一見早々令進達候御一同先御一見に早々御傳達忠能迄可返給候其上寫可申付候間寛々御覽可給候早々御回達可返給候也

二月三日申剋

忠能

| | |
|----------|-------|
| 大炊御門大納言殿 | 新大納言殿 |
| 權中納言殿 | 日野中 |
| 三條中 | 正親町中 |
| 甘露寺中 | 新中 |
| 醍醐中 | 新宰 |
| 冷泉宰相 | 別當 |
| 宰相中將 | 源宰相中將 |
| 右宰相中將 | 新宰相中將 |

右四日申剋爲理卿被返却

四日申剋過自省中文匣來二八二冊來

十二月十二日亞墨利加使節 對話書

二冊三丁

十二月廿三日亞

八冊丁

右二冊共井上信濃守岩瀬肥後守名あり

對話書二冊八唯今被達候間早々令進達候昨日之通速御傳達可返給候也

二月四日

忠能

大炊連名如昨

五日 十二月 日對話書三一冊丁 來一見即四辻へ觸出了 七日 全八冊 都合に被送各回覽に出す九日皆歸る

此度亞墨利加國の使節依願御目見など可被仰付御治定被成候旨御内々

御達御書付の趣拜見候熟考仕候處右は先頃も上書仕候通今更申上候迄も無之萬事彼か強相願候儀御差許被成候は第一御國威に相拘り可申候未だ彼を不奉願内此方々被仰付候御趣意に御座候は、聊御威光も相立可申何事も指揮を受候様に御國體は被爲對恐入候御儀に奉存候當時之世情尊卑外之義理故相辨つ者は甚少く彼外夷も一國我國も一國に而尊卑之差別も無之様相心得候者も有之已に兵法も彼を知り己を知れば百戰百勝と有之然に當今蘭學者而已重く御取用被爲在と畢意彼を知る迄に御國體を知る者無之所外夷を御側近く被爲召候御一儀にも相至り候御事と乍恐奉存候抑亞國之儀は去る嘉永年中押而内海え渡來以來強而願意押張御國法を以御斷相成候ても兎角我意相立候故自然御國威も薄く相成候様にて追々士氣閉塞致候ては假令數十年相立候ても武備充實仕間敷候元來皇國は神武之御國に候へは士氣振起致候は、一二年は扱置暫時之間には御武備は滿溢可致誠に當今の人情

追々外夷耻辱を取り畜憤罷在候へは今にも打拂御決着被仰出候は、士氣も一時に震ひ可申候儀は眼前に奉存候右に付ては此度御目見へ之廉を始萬事此方々申渡儀故違背不申候は、交易其外をも御差許可申左も無之候は、我國も耻辱にも可相成候間無據打拂にも可及旨被仰渡猶も其以前諸藩へも右之御趣意を御内達も御座候は、聊不覺に相成候儀は有之間敷奉存候右御國忠之一端と不顧憚愚考申上候猶別紙可奉申上候以上

松平肥前守

二月五日 老中堀田相模守以下上京旅宿寺町傳奏議奏同日行向

九日老中堀田參 内有御對面又御殿鳳輦等拜見之旨也

十一日兩役堀田旅亭へ行向一件被談合事に於關東決着必竟届之次第の旨公純卿内話也川路津田なと頗演舌各信醉無術體也と云々昨日自午半面前に至談合主人向へは切飯煎バ差出旨也恭光卿依當番不行向云々

一隆祐卿内話九日殿下太閤兩役杯へ老中上京に付進金銀よし也

准后へ綸子 判金 廿枚

後聞禁中へ

黄金孔雀置物 一

尺餘伽羅 一

判金 五拾枚

献上

兩殿

殿 銀百枚 太 五十枚百枚のよし

武傳 銀五十枚ツ、云々

一去正月 日曉天所司代役宅燒失に付差控之儀關東へ伺之處 日不及差

控由有示命全墨夷一件老中始連々上京に付頗法外寛宥之旨有風聞

一十二日胤保朝臣内話ハルリス正使大病先日下田へ引取候處とうか死亡歟之風聞

有之由也所勞しよいかんの由也

一二月十三日又兩役向本能寺云々

同日予不堪愁憂送内書於公純卿

彌御安全令賀候抑昨日於省中拜面畏入候極内々御尊一昨日堀田亭御行向御問答之振合事々關東決定京都へは届同斷之趣昨日御兩役御前

之御様子如何御時宜に相成候哉何卒先日御内定之御沙汰通に相成候様内々心中祈居候事に候昨夜も大掛念實は安睡も不仕唯長歎息之至に候此水戸昨年太閤殿へ進上之書中とやらにて寫置候眞偽は不存候へ共至極理を盡し明斷に有之候此上萬々一關東申立之通など申す御時宜に成行候共せめては此文中全々幕府諸役人共の所爲にて朝廷には決して其思召に無之と申候へは天下有志之大小名始め一同憤發恢復之期も可有之云々此趣位は天下へはきと分り候様不相成候ては實に〳〵神州の大瑕瑾大耻辱無申條事に候委細之次第言上被聞召候今に至り候ては關東にて不當の所置は被捨置於朝廷は増鏡弘安の叡慮に不被爲在候ては實に〳〵伊勢并神武帝へ被對乍恐被仰譯も難被爲在哉附ては於臣下も夫々祖神へ申譯も難相立事と存候如下官非其職越樽千萬其罪過當死候へ共如此重大之國難不堪閉口不願恐申上候尤從來御懇意に付申上

候御役外御聞取可給候也

二月十三日

忠能

徳大寺亞槐公

追申護王大明神々魂更奉感佩候也

(原朱)予非其職越樽勿論也但代路豊長盡寸忠也

拜見如貴命春澤潤色候御清康恐悅不斜候然は御細書之旨何も敬承候誠以御精忠之儀感心候乍不及事之三等も御同意之事に候兎角姑息に相成且又御返翰之處も平穩に可相濟哉と唯々困心仕居候別紙御寫拜見畏入候十一月十九日江戸書狀寫いまた一覽も不仕候心得に相成辱存候乍不及事誠重大に候間力のかきりは可盡精忠と存候水戸先日の書狀には甚々如何敷候へ共全々以一橋當正月元日に強諫故無餘儀外見承諾の事に

候中心悦服と申場合にはとんとくく不參申外尾州始も全先達來の見込に少しも相替候儀無之旨に候昨日も御對面有之候へ共武傳も同席不能委曲遺憾の事に候今日も今一應一昨日輩面談申來無程行向候事に候何分にも大重事神州の瑕瑾當御代より相始候ては一同も恐入候事は誠にく御心附御力を被添候段感佩仕候事に候尙又委曲心事拜上と申殘候無程出行已前大に亂書眞平可蒙仁免候任御篤諭打明申入候觸忌諱候事も有之候堅固御莫言希入候御覽後御投火偏にく願入候自餘は屬後鴻候也

二月十三日

追申御寫一番は極密々々拜借希入置候也

内容

公 純

一議奏五人判金一枚つゝ拜領のよし也定有明斷歎可笑々々殿下老公武傳

一二十五御會奉行六人有召賜方金千疋宛是夷國之儀御志願に付度々御法樂被慰勞由也何卒被捨姑息之愛被執大義之業度也

二 十八向公純卿亭内談同日於省中建通卿秘密内談殿下の事老公の事

廿日參 内存寄書附武傳兩卿 大坂海邊昨朝異舟遠見之旨有風聞虚言云々同日所司代參 内武傳□兩役内談

廿一日實愛卿來内談實萬公傳示一番之事明朝進返書

廿二日老公春來所勞之處今日出仕歎息々々

廿三日建内話 殿下 廣橋 久我 萬里等へ一封をなけ入由各同文奉大

書切紙以油紙包之其意味備中守申條可被泥趣意甚以不可然被對神宮等國也於被同之者雖大臣可相威込不遠由書之也

是迄數度内願仕候處更に無御聞入も此節到り堀田備中守の賄賂を取終には關東役人共懇願通に御評定御斷とも可相成由風聞承り以之外之儀に御座候年來奉畏 朝廷無甲斐も剩奉穢

天照太神之御威德候儀以歎ケ敷次第に御座候たとへ三公公卿方たりとも國賊共御同志に相成候は、無程有志之士申合し不殘國賊之徒打捨令知天罰可奉輝 神國之武威者也
右之通にて上に上文字あり

殿下へのは判

爲國カ 作名ありと云々

一重胤卿亭へも投入由也仍被告關白家如左
亞墨利加一件種々風評心配仕候折柄此一封門内に投入有之候昨日見出候何人之所意とも不分尤無心當候へ共文面之事情不容易儀に付棄置候儀甚不安心に存候間内々各迄入進覽候事

二月廿三日

重胤

諸大夫中

一内々 禁中へ一萬金可獻 又兩殿下へ一萬兩つ、武傳へ千兩つ、可送由之處 禁中は 叡慮不可被同之獻上不宜殿下命歟 殿下之不被受之 太閤は事濟之上目出度可被受由にて返却依之武傳迷惑同太閤之趣意歟と云々

一昨廿一日何分 神國之重事被對 神宮等難被決定に付諸大名再衆議談合之事可被 仰備中守一定候處太閤昨日出仕和親貿易之儀可然由決定被言上依之又々破談但
叡念は不被爲替殿下も隨分不被替に付廿一日の評定位には可復由内話又今日太閤へ久我徳大寺萬里など被招如何可有之心配之由也正房卿は今日不參之由也

過時は御書中之處學院參入中不能即報恐入候爾來御清適令恐賀候然
は昨朝は於省中拜面畏入候其節御意中申伺且建白之御草案迄拜見深く畏
入尊慮之被爲向候處至當之御儀共實に感佩仕候拙愚存も申上恐入存候
夫に付内問之御一策令拜見誠に慷慨之御心根深々安心此事に候是社忠
節之御儀と奉感國と存亡を共に可爲之御儀と存候乍不及尤此御通りに
て少しも存旨無之且内々申上候邊も御書加に相成候處是も則拙存心此
通にて候何卒此通御差出可然奉祈候西側之儀内々申上候邊御尋承候同
くは矢張西側へも別段御封中に而彼家司迄御差出可然存候無左ては中
途にて消候も難計存候大分に御激切之御書取故武兩卿計に而は東老公
にて被□候は畢定候間西へも出し被置候様に拙は存候不苦候は、御差
出之方願は敷存候將又昨朝内々本を堅め候儀色々と運策候漸昨朝申入
候邊に相成至極安心と存候處又々少く變し候儀有之大心配仕候夫故昨

日は夜分迄も此儀に取かゝり居宇郡相招令示談候儀共有之扱々困居候
叡念之邊は少しも變り候儀は無之恐悅至極是而已に候何れ今日は又々
宇郡氏返答に入來筈に候いつれか來候は、又々舌戰と心得居候何分に
も國忠を報し候半時節に候へは擲一身不顧左右只々天下之御爲に宜様
と而已日夜心配候へ共存知通程にも不參り申痛歎仕居候今日も承候へ
は風聞なから松平伊賀守又々上京に相成由に候是は堀田とは趣意相違
之由餘り堀田か押付け候半間早々上京に相成とか申事定而取留風説
と存候へ共申入候川左は兩端に心を用ひ候由に承候如何之事哉頓と不
分儀と存候彼は彼に致し置御膝元之論如鐵城ならては何事も不相成儀
と只々勞心根候御推察可給候自余面上可申入候早々如此候也

二月十九日

二白何分にも邦境之臣は死于邦境 天子は死于社稷と申か至理至當
之事に而候へ共只夷情に被爲恐嚇候て互市之説に落入候は利を好め

義を好との辨別に於義利之辨利相分り候へは何も可恐儀に於は無之
と存候吳々御書取之件々實に奉感心候尤相知れ候事ながら始終此御
心不朽様奉祈候急大亂書可被免給候也

桃源

子 固 賢 兄

御覽後早々御丙丁可給候也

一廿四日參番中

武傳光成卿聽長卿は依正忌不參於議卿役所光成卿被申渡候亞米利加國一
件に付備中守上京彼是不容易事件に付右御用多武傳加勢被 仰下旨也
忠能申云愚昧之質不容易御用被 仰付甚以恐入候間御理申上度由申入
處被定 天氣之上は直御受可然由重被示右之上は不及是非申御受之旨
左大將殿御參
中届申

一久我被示之旨有之兩役は御用に預之旨但多議卿は上三人之旨被示之
一及夕於同所同卿更示云先時申渡加勢之事光成全承違之儀有之に付不
申渡分に可心得被示之承之旨申了

此事件輕卒之至 朝政以之可知之但當時之形勢不如非居要路於停
止は予本懷也唯 朝議之廉忽可歎世也

一廿五日依命向久我家昨日時宜内話有之一昨兩役所行向議は久徳之處東
坊違兼約以表向之儀爲内談之取計有之 逆鱗殿下同大怒依之止出仕忠
能可爲加勢嚴命中渡濟之處太閤へも無御沙汰且東坊城先年加勢之時武
邊打合せ有之由心付宥御沙汰間違之分取計と云々一笑々々以不談勢利
爲樂以寵辱不驚爲樂一予赤心漸露顯云々
一依命向三條家内府面會長談

一 廿三日 向之時 攝行
一 州兵 庫開
一 港可 除事
一 京師 警固
一 大身 置事
一 可被 置事
一 所々 開港
一 無之 裁見
一 後之 裁見
一 此三 條備
一 中以 下へ
一 掛申 由也
一 能申 被仰
一 更建 白條
一 遣中 以之
一 内を 以之
一 及不 合之
一 之切 不可
一 之也 大義
一 混不 慮及
一 混不 慮及
一 服也 感通

一 西城人體事 一 橋座主を上へ申上殿下へ之事
一 夷種拒絶不得止 叡旨書追加事附是も最初のも其寄々々申大名事
一 武傳二人止の事
一 夷族へ再掛合之節は輕重共必大々名へ京都警固示事

廿五日夜子剋過地震丑剋計又震參 内
自未前剋夜丑剋迄大坂大火
一 地震勢州の方元の由也
行向傳兩卿 正房卿

廿六日雨申刻過地震自午後小動三四度云々

廿七日 大般若經轉讀了依示向萬里小路家實愛有内話之旨廿八日朝添書狀

進入之注 亦廿三日 叡旨書取如左且兵庫之事 京警固之事 行々見込
六丁後 之事等有掛合由被示兵庫以下之事甚不可然唯大名建白之事計可有御沙汰存之旨再應申含了

關東の被 仰遣候書付寫

今度之一條不容易奉 神宮始御代々の被爲對候も可有如何哉深被惱
叡慮候到此期候は人心之居合國家之重事に候間三家以下諸大名之赤
心被 聞食度 思召候今一應被下台命各所存被爲書取被入 叡覽候様
宜御取計有之旨可申入關白殿太閤殿被命候事

二月

今度之一條不容易事奉 神宮始 御代々の被爲對候も可有如何哉深
被惱 叡慮候至此期は人心之居合國家重事に候間三家以下諸大名之赤
心被 聞食度 思召候今一應被下 台命各所存を爲書取入 叡覽候様

宜取計旨關白殿太閤殿被命候段御書取之趣奉畏早々關東に申上候事
右萬卿廿九日内々被見

二月晦日

一向久我家有内談西城之世子早可有治定一件政通公昨日被辭内覽暫 勅
答可有之歟

一參番中自武傳

別番二通爲心得入見參候現任納言參議藏人頭迄御傳可給候也

二月三十日

聰 長

光 成

中山殿

追申議奏へは不及御傳候也

右に關東へ被 仰遣候書付寫

今度之一條不容易奉 神宮始……………

堀田備中守返答書之寫

一應接假條約之趣無餘儀次第兵……………

右二番に回文を添大炊御門大納言以下至頭右大辨十八人連名觸出了

三月一日

左内府 左大將 二條大納言等有内談之事

三日

建通辭役差出予を舉申由の事

四日

於桃梨公面會 ○左府一條二條申合西丸之事花族も申立之事殿下不
同心二條を以申勸めの事右に付此儀は同心の事 ○殿下不同心但是
後之取計方書付可被見一日有命由也 ○上にも建の強過御困之由曇掛
るか可歎々々 ○老公内覽上京之面々歸東迄此儘不 聞食候様内願左
すれは息子急度不可被掛應對様取計の由急々被聞合時は何體に變し候
も難量由の事

二六 從關東返答書殘簡

安政五年三月五日

去月廿三日被相渡候御書取之趣則關東に申上候處別紙之(原朱)以下無之

二七 老中より在京堀田備中守宛殘簡

安政五年三月五日

今度爲御使上京之上委細傳奏衆を以被奏達候處去月廿三日兩卿并議奏

衆御自分旅宿に被行向此度之儀深被爲惱 叡慮候到此期候は人心之
居合國家之重事に候間御三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候今
一應被下 台命名所存被爲書取入 叡覽候様關白殿太閤殿(原朱)原書此續文無之

二八 就墨夷申立書等

安政五年二月廿日

就墨夷申立之儀

爲商賣定則六則

一冊

巳十二月二日堀田亭應接

一冊

同 四日使節差出書

一冊

近來世界一變戰國七雄之姿書取 一通

右去正月廿六日被見下所存可申上由に付恐入候得共先日以一封言上仕
候

十一日 十二日 十四日 十六日

已十二月

對話合 八冊

十八日 十九日 廿一日 廿三日

右今月三日以來追々被見下

條約下案^{十四}條

一冊

御兩役の堀田旅亭にて演舌書

一冊

右去十六日被見下不審之廉も候は、無遠慮可申入旨被命畏承候右八冊以下得と一見仕候處事之輕重は有之候得共全體之夷情初は真切を本とし實は國人を籠絡の應接にて最初嘉永丑年書を渡し置き寅年和好を定め互市の場を開き次に沿海の測量を望其上江戸へ押入大樹公對面老中直談等皆彼か本よりの深謀遠慮にて一時に申立候ては一國必死を究候を察し輕より追々重に到り彼牛皮の説の如く遂に大に欲する處に及し我國を併吞致候姦計無疑候加之教法之一件先日言上候得共邪教傳染の程甚以危候猶十四ヶ條之内には依事目前の利益も有之暫は治平も可取

繼候得共後年必定 國家之大禍害に可相成候征夷家の趣旨近頃國辱武威之沙汰も暫々稀に相成依形勢可有 大變革處國內人心不居合旨又は諸夷同盟猛勢に付不可敵或は理世安民を説て當時の無事靜謐を主とし毎條精々被爲取縮候處の下案之趣に候間於關東は此上被取扱方無之儀に候哉但爲被伺 叡慮備中守以下上京之儀故國憂に可相成儀は御沙汰有之候方却て 公武無御隔意御合體之譯にて御差支は有之間敷何卒 神國之威稜を興復し蠻夷の狎侮を洗滌し 公武萬々世彌御長久之儀專と奉存候當時武備政事關東之所置には候得共日本は萬王一系之 皇國勿論に候間蠻夷追々驕傲不遜之夸辭を以て脅制に及猶此上諸蠻來集し相共に難題を申立之を拒めは兵威を以て令驚嚇不奪不厭の場に至り終には手を束ね彼か管轄を受け坐なから外夷の屬國となり赫々たる 神國膝を犬羊に屈し國政次第に哀微し挽回の時無之 神州之美號永廢絶候るは實以君臣共に歎ヶ敷儀には無之候哉甚恐多御事に候得共當御代に

て右様相成候は

伊勢皇太神を奉始 神武天皇以來

御代々 神慮之程如何可被爲在哉と深恐懼歎入候弘安元寇之節至誠之
叡念今に到り萬人奉感泣候御事に候方今應接防禦専ら征夷家へ御倚任
之儀に候へは所謂微管仲吾其被髮左衽との聖語即幕府の所置に有之候
間偏無國辱様可被頼 思召事と存候何分此上於關東猶再三諸大名と衆
議を被盡 神州の浮沈の議論無腹藏實意之談合之士氣を興し衆心を一
して威武を宣揚し倭魂を專として 神國の大憂を除き候様御沙汰肝要
と存候夫共於關東は何れ被改祖宗之良法變革一決之事に候は、此後夷
國に付決る國家之禍害無之御請合被申候哉若生後患候節は其咎は誰へ
可被任哉之儀急度御尋問可被爲在且右大變革の事に候は、於 朝廷も
品々御改革不被爲在候ては 叡慮不被安御事も被爲在候由兼て可被
仰置候歎惣體之處何れにも國中眞實に不一致候は、内外之禍亂と存候

ケ様申上候へは井蛙之見固陋之至世界の形勢をも不辨甚以公平之論に
背き事を破るの基と可被成且戰爭は大切之儀容易に不可論旁和議專要
に付如此愚論は可取捨との説も定て可有之一通り尤に有之候へ共當時
右之通にて五ヶ年十ヶ年國辱を忍候上急度挽回之期有之儀に候は、其
分可宜候へ共際限之見込も無之苟且因循し國中の衆心安逸利欲に誘は
れ國辱國讎も相忘夷族は彌猛威を張候様成行 公武之命令も届兼候時
に到候ては實に恢復之術無之と歎入候 朝家之御爲は不及申於徳川家
も東照宮禍亂を平定の神撰亂反正功にて今日之治世深感佩仕居候儀彌
無事長久肝要と存候間猥りに觸忌諱候事共誠以多罪恐入候へ共危急切
迫之時情に付一身を不顧内々御兩卿へ申上候事

二月二十日

忠 能

右二 廿附兩傳了

憲問第十四 子曰管仲相桓公覆諸侯一匡天下民到于今受其賜微管仲吾其被髮左衽矣

二九 條約之件不容易云々等 安政五年二月

一條約之事件不容易儀伺も無之取定拘國體之間惣て御許容難相成本條約取交之迄に拒絶可致事

右は當然之事なから夫々罪人之所無之候は被行かたく其次第甚不容易哉其中内外之亂出來可申其覺悟無之候は不相成事

列國諸大名も二手に相成居且又外國の兵引入も難計能々勘辨無之は難叶哉西城人體賢明之人出來之上迄は甚危く被存候歟必此正論に可出とも唯今上京之大へ出候は決る異變を生し可申と存候

一には 叡慮御嚴重其通り被申渡候へは關東不容易之次第に付執柄宥め可被申上候へ共實に御尤之御事故容易に被申上かたく候間執柄申行に

午二廿一實
萬公以愛
紙同談加
了之趣返
第一論當
正論當然
候へ其此
難之時勢
存候六ケ
數

第二の條御
深慮も可被
爲在令察候

併當時老
上京遠有
法由一設
之由一設
へは一設
物上京候
程し手組
候應對の
無答之存
其邊御見
伺度候

第三四少
御寬宥相
列國萬人
有之候半
哉

て御相談として大樹上京も被 仰出度候へ共差向混雜も可致候間三家々門之中中々早々上京可有之と申様に被達其上御決答可被爲在事

左すれは御熟談可相成哉上京之輩一旦歸府成共右上京迄待居候共勝手次第歟事

一つには不審不容易事件見込如何と被尋問夫々以書取答書爲差出乍不相當も上京之者の申分有之候は、其分にて歸府之上三家々門へも申談更に閣老一同御受可申上様に被示

又條約中に實々難被宥事條可相除様勘辨可致被 仰歟是も一旦假約濟事容易に承知も致間敷候へ共何分歸府之上可申出被 仰歟事

一つには不審不容易被尋儀同斷
條約之趣總て關東へ被任候間猶富國強兵之儀急度勘辨有之不拘國體様華夷之分別を立國威更張之儀無弛可有勘考と被 仰歟

是より以下は無論歟

(原朱) 事情急迫之場合何卒早く御返答御宜哉存候尤猪軍固陋之論は一向不宜候へ共十歩百歩之論にて何れ六ヶ敷事件に候間せめては方今にては外國に笑れざる様後世よりは彼時宗之所置の如く正路賢明之所置と存候様致度物に候

二廿二實
萬公へ進入

異種亞米利加國は嘉永丑年關東へ呈書以來彼是取扱之上和親有之由條約十四ヶ條下案 叡覽被爲在備中守等演舌之趣被 聞食候追々應接不被得止儀とは被 思召候得共條目之中實に後年國憂に可相成御差問之廉も相見元來於夷國之儀は 先帝御代中か深被惱 叡慮到昨冬追々關東に 御沙汰に相成候御次第も有之全體之處 皇國を輕蔑致候譯にて國辱之程 神宮御始御先々之 帝王へ被奉對深歎 思召候 叡念不洩御事候依之三家始諸大名之面々は迄存念建白も可有之候へ其實に國家浮沈此時にて先條被對 神國深歎 思召候 叡慮之趣を以て今一應厚

被盡衆議諸大名一同各不憚忌諱無腹藏存意書取にて 叡覽被爲在度御沙汰候事

△一は右衆議を被盡候上被伺於 神宮之 神慮候て御一決之儀可有御沙汰候事

△又は其上和親之方衆議一決之儀に候は、此後夷族之儀に付決して國家之禍害無之候哉於關東急度御請合に相成生後患候節之取扱之見込有之儀に候哉其儀無之候ては甚以不被安 叡慮候事

但最初不承知追々發明會得之輩只今は十に八九に相成候由も被 聞召候尤固陋之論に被爲泥候儀には一切不被爲在候へ共何分 皇國重大之事件當 御代に被改革候儀深被惱 叡慮候間本文之通被 仰出候事 一上京之面々へ御沙汰餘り御延引にては甚如何存上候間凡ヶ様の被 仰下に相成上京之輩何と申立候ても何れ此通の御沙汰故早々於關東建白之上銘々存念無腹藏可有言上由押て可有御沙汰事

一建白之上各申上正論候て倭魂を挽回の事に候は、
 趣を以此上は於關東も可被決定御返答可被爲在事
 一建白和議多分之時は於 叡旨は上之文通厚被惱 叡念深歎 思召候へ
 共何分武事兵備等は専ら被倚任于武家御事故關東始武家之面々和親之
 方多端之上は不被得止先暫被任其意天下之形勢可有 御覽 御沙汰に
 候但條約中

右之條目はいかにも深憂に被 思召候間夫々示合の上停止可有之尤此
 以後條目被改候廉も有之候は、於 朝廷も御差支有無先被打合候上夫
 々掛合可有之由 御沙汰被爲在候事

二廿八萬
 里家へ送

蠻夷依申立和親之上條約下案等 叡覽被爲在候に付猶又三家始諸大名
 之所存更被 聞食度由去廿五日以書取申入候處於諸大名は舊冬於關東
 被聞糺候處々 — 之外は夷情に隨從之方同意に付再御尋有之候共可
 爲同様旨被示聞一應言上候處右之次第に候は、可爲同斷哉に候へ共元
 來夷國之儀は 御先々代より深被惱 叡慮毎々關東へ御沙汰之次第も
 有之全體之處 皇國を輕蔑致候譯にて 神國之耻辱 神宮を始 神武
 天皇以來 御代々え被奉對誠以歎 思召候 叡念は深重之御事に候依
 之三家始諸大名是迄存念建白も可有之候得共實に國家之大事此時に候
 間先文深以歎 思召候 叡慮之趣夫々委細被申聞爲國家各不憚忌諱
 眞實之存念書取にて 叡覽被爲在度 御沙汰候事
 但最初和親不承知追々發明會得之輩當時十に八九に相成候由固陋之
 論に被爲泥候儀には一切不被爲在候へ共何分 神國重大之事件當御

代に被改革候儀深被惱 叡慮候間本文之通被 仰出候事

二廿八萬
家へ送

近頃蠻夷之儀追々不容易事情誠以被惱 叡慮於關東も御心痛之程察
思召候然處西城之世子未被定尤無事之世に候は、寛々御沙汰可然候へ
共先件實に不容易時節に候間速に被撰其器治定有之本城西城共に國家
を被鎮護候は、可被安 叡慮候由 御沙汰に候事

二月廿八日内々正房被見予存念過日同卿并三條内府へ申通唯今之内條中
之議論不可然也諸大名へ更建白之御沙汰及混合不貫徹也但此返答押返
之論可有之なから先大名中の建白の上の事なり

堀田備中守返答書之寫

一應接假條約之趣無餘儀次第にて開港候とも舊冬十二月廿四日被仰進候

212688

通畿内及 皇居近國被相除候様にと 思召候間攝州兵庫被除候様には
相成間敷哉之趣

右は應接筆記中にも粗認御座候通往復辯論を盡し可相成丈取縮爲致
談判候へ共諸外國人共素々京大坂江戸之都會深く見込眼目に致し
願立候儀に而古來泉州堺は外國人渡來交易仕京地南蠻寺等有之類盡
傳聞仕居何分承引不仕候へとも種々手段を盡し追々談之上京師拾里
四方之地には亞墨利加人不立入筈咤と取極其代り兵庫を開き且山城
國之方角尼ヶ崎領内猪名川を限り不立越候積漸承伏仕候儀に付唯今
兵庫相除候様申談し方無御座右之場合迄押付候は容易之事に無之段
は深く御恕察有之度候事

一當時 皇居寔以御手薄之儀 御不安心 思召候間畿内并近國之内
皇居四方に可然大祿之大名堅固に警衛出來候様に被遊度 思召との趣

右は兵庫開港に相成候へは猶更之儀當時關にて専ら御取調 叡慮を安し奉り候御存意に御座候猶 御沙汰之趣も有之別て厚く評議仕夫々取計可申心得に御座候事

一開數港建商館候儀當時之處尤制法も御行届之御事候往々無壓之夷情追々相募終には反亂に及び候儀無之哉見込之處可申上趣

右は方今之時勢和親之廉を以御取扱無之候ては速に海外諸國の怨を結び各國を敵に引受戦争を醸し候に付大凡各國承服可仕程之御振合に御措置被成置和親交易を以富強之基を御立被成候外無之尤條約之儀は雙方無事を謀り候爲之儀に御座候間條理無き仕向さへ無之候へは擾亂を生し候儀萬々無之筈に御座候へ其後來到り如何様之間違を生し其國と爭論可相生哉意外之變事は豫如何共難申上候得其後來萬一之變革を見越し唯今條約を相拒み候へは各國差湊目前擾亂を生し

候儀は差見へ居候儀に付右等之儀無之方に御取扱御座候る追々弊を生し不申様武備教化を盛に押立自然信服仕候様御世話有之候外有之間敷奉存候事

三〇 八藩連署上書

安政四年八月

去月廿日御書付を以御内意被仰間候亞ノリカ國官吏之者拜禮之趣御聞届に相成願之通登城之上通御之節拜禮之儀和蘭加比丹の一統重々取扱方等御治定被仰出付ては不遠可被召寄候に付銘々存寄之儀可申上尤右之趣京都にも被仰進即日御警衛向等評議之上可申上旨被仰達候付篤と勘辨之上在國之同列には飛札を以申談夫々致熟考候様公儀御職掌に被爲對萬世之御規格一時に轉消候譯にて容易に何共難申上候且申迄も無之候へ共最前彼を拜禮相願候節御内意有之候は、評論を可盡之處無其儀被仰達候跡にて彼是と評論いたし申上候儀無力次第にて一同重き職

前に蒙台命居候上は今更迎も是非之趣不申上候ては恐入候譯に有之は申迄も無之御國體え對し當御代に至り初て蠻夷之者共の御面會も有之候様にては諸蠻追々時々剋々同様之願意申立候は、御聞濟は勿論一々御意も甚爲背本意の御取扱方にて何共不容易此度御差許有之候ては先般被觸置候御國辱に不相成候様にとの御意も自然と相消諸人の被相對不一と通御儀と實に恐入候儀に候へ共御國辱之儀は別紙を以愚存之趣申上候儀に御座候然る上は登城は勿論御呼寄等之儀は可相成其筋へ可申談被仰渡可然様に奉存候以上

安政四己八月

- 松平讃岐守 井伊掃部頭
- 松平肥後守 松平隱岐守
- 松平越中守 松平民部大輔
- 松平宮内少輔 酒井若狹守

○
 一 林大學頭津田半三郎三月五日御用濟發足歸東
 一 使節堀田上京之日下田へ申歸り所勞快に付三月二日出帆江戸へ出府致居

一 堀田隨身の笛一管交肴一籠内献上伺三月十日廿日不可獻被仰下

○
 一 山門一同知恩院一同非藏人之輩申立 三月十四日

○
 一 堂上八十八人申立三月十二日同百六人非藏人五十餘人へ神思召拜領物四月十七日

二月五日堀田備中守上京寺町本能寺旅亭即日兩役行向公純卿所勞不被行向

九日堀田初參 内

十一日行向兩卿建通公純正房等卿

十三日兩卿正房卿建通公純等臨期不參

廿三日兩卿建通公純等卿

廿五日兩卿正房卿恭光卿

三月五日兩卿俊克卿

廿二日光成卿正房卿恭光卿

廿四日光成卿建通卿公純卿

三一 耶蘇誕生を起元とす記事

昨冬書翰に千八百五十五年と紀年候切支丹國を本國と致し候年紀に候由如何

右亞米利加本國にて千八百五十五年に認候事に御座候即安政二卯年に當り去巳年は千八百五十七年に而同年十一月中千八百五十八年に相成候右西洋各國の教主羅馬人耶蘇誕生を起年と仕候由に御座候

三二 關白より老中堀田正睦へ被命書其他

安政五年二月

今度之一條不容易事奉 神宮始 御代々被爲對候も可有如何哉深被惱 叡慮候至此期は人心之居合國家之重事に候間三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候今一應被下台命各所存を爲書取入 叡覽候様宜御取計有之旨關白殿大閣殿被命候事

二月

○右二月廿三日光成卿 聰長卿 建通卿 公純卿等堀田旅亭本能寺行向被申述

○此日 兵庫開港難除哉事 京師警衛可嚴事 開港以下任望可无後患哉見込尋事

以上三ヶ條有尋問由也不可然諸大名赤心被尋問之詮無之如何々々

○廿五日兩傳 正房卿恭光卿等行向廿三日一昏之儀有談合關東へ達兼之旨有内談正房押て被申述於子細可申達治定

○廿六日^{七カ}早々關東へ可申上由以書取申越す

○晦日 右關東へ可達由之書取一通并兵庫開港以下三ヶ條上京之輩演舌返答書一通等二昏三公始現任之輩回覽有之

三三 老中連署上書

安政五年三月朔日

去月廿三日被相渡候御書取之趣則關東に申上候處別紙之通被 仰出候間其段御心得宜奏聞可被在之候且又右一條追々時日相延候内亞墨利加掛合向差縫候歟或は英吉利船等渡來致し如何様之混雜を生し可申哉も難計左候^不は國家之御爲甚以不可然候間可相成は早々 御沙汰有之候様仕度候事

今度爲御使上京之上委細傳奏衆を以被及奏達候處去月廿三日兩卿并議奏衆御自分旅宿に被行向此度之儀深被惱 叡慮候到此期候^不は人心之居合國家之重事に候間御三家以下諸大名之赤心被 聞食度 思召候今一應被下 台命右所存被爲書取入 叡覽候様關白殿太閤殿御沙汰之趣書付被相渡候に付右書付被差越到來候則及言上候處 叡慮之趣御尤之御事に被 思召候得共人心居合方之儀は如何様とも關東に御引請被遊候間被爲安 叡慮候被遊度被 仰出候間此段傳奏衆へ早々可有通達候恐々謹言

三月朔日

脇坂中務大輔

安宅判

久世大和守

廣周判

松平伊賀守

忠固判

堀田備中守殿

内藤紀伊守儀は病氣不參中に付連名不仕候事

老中奉書一通并堀田口上書一通等

右三月五日光成卿聰長卿俊克卿等於旅亭受取

三四 小御所に於て御沙汰其他

安政五年三月廿日

墨夷之事 神州之大患國家之安危に係り誠不容易奉始 神宮御代々被爲對恐多被 思召候 東照宮以來之良法を變革之儀は闔國人心之歸向にも相拘り永世安全難量深被惱 叡慮候尤往來下田開港之條約不容

三月七日七
人連名之一
紙附武傳兩
卿八日十五
人申一條殿

同御十一日
同治十二日
任紙有八日
又一諸臣申
餘以不量八
紙參人連立
事有申立之

十六日建通
卿へ忠能奉
仰行向忠能
辭退之趣思
召候尤共此
頃候一件に
付三公も時
々柄故御分
早御沙汰有
仕殿下傳出
仕候日傳出
十七日聰長
卿御役辭退
被聞食退
駿河守頓病

易之上今度假條約之趣に於ては 御國威難立被 思召候且諸臣群議にも 今度之條々殊に 御國體に拘り後患難測之由言上候猶三家以下諸大名 へも被下台命再應衆議之上可有言上被 仰出候事

○右三月二十日於小御所中下段 殿下 三公兩役列座自左府公堀田 備中守に被相渡左府公口上

先日之御返答彼是御延引に相成候早々歸府之上大樹公に所司代候下 段 被申入候様被 仰下候

○同日於虎間賜酒饌三汁 又明廿一日可賜歸府暇哉武傳内示之處引 取拜見之上可申左右由にて退出

○廿二日 兩役 光成卿 正房卿 恭光卿行向東使演舌書如左 又形勢一 川瀬以下面諫書一等 自武傳西城

一件有内談由也

三五 所司代本多忠民等招命の件

安政五年三月廿二日

一昨日 勅答之趣得と拜見候處深被惱 叡慮候段奉恐入候儀に御座候然處墨夷之儀は掛合同も相詰候上之儀に付此上之異變難計候處 勅答之趣も有之候上は此後何れとか御決着相成候迄は於關東寬猛兩様共勅答に對し御取扱被成兼候間萬一差向事端差縫候儀も有之候節は其機に臨片時も難申延儀出來可仕も難計其節は一方に御決斷御取計有之候も可然哉左候は、英夷等渡來之節も同様御心得可有之哉非常之儀は何時と申儀も難相定候に付無餘儀御旨意奉伺關東に申遣度奉存候間早々御沙汰有之候様仕度候事

是迄招は堀田也今度本多と云々

○右三月廿二日自本多美濃守兩役招に付光成卿正房卿恭光卿等向堀田旅宿受取言上翌廿三日 殿下三公實萬公兩役評定

一昨廿二日書取之趣及言上候處今度之條約逆も御許容難被遊自然差縫候節は御許容難被遊御趣意を以精々取鎮談判其上彼々及異變候節は無是

非儀と 思召候右 叡慮之旨相立候様衆議可有之台命之儀頼 思召候間宜被差合御取計可有之候事

○右廿四日光成卿 建通卿 公純卿等同所行向被及返答○公卿 勅使之事今日武得計を申述有之由也

三六 風聞書

安政五年三月廿六日—四月初日

- 一 永世安全可被安 叡慮之事
- 一 不拘國體後患無之計略之事
- 一 衆議言上の上 叡慮猶難被決候者
- 一 伊勢神宮神慮可被伺定儀も可有之哉之事
- 一 下田條約之外は御許容難被遊に付萬一及異變候節防禦方略之事
- 一 右之條々衆議可有言上事
- 一 右同日注切紙被渡置之處如左

此口上はハ
ルリス出ハ
待て居候間
歸府候は
直に黒白の
返答に及ば
由は承知

此程私儀歸府仕候様被 仰下候處委細口上にて申上候通先當表に罷在
就ては御用辨之爲岩瀬肥後守儀江戸表に早々出立爲仕候儀に御座候事
右一紙

一昨日相伺候差向候異變寬猛兩様之内御取計方之儀は此度 勅答之趣
に付猶於關東衆議之趣言上仕 御決答被 仰出候迄之間萬一異變有之
節之心得方相伺候儀に付右之 御沙汰無之内は衆議仕兼候との儀に
は無之候事

右一紙

○以上二枚廿二廿四の應復少々手違候歟に申述廿四日 相渡受取歸らる
の由也

四折

去廿二日書取之趣及言上候處今度之條約迎も御許容難被遊 思召候衆

議中自然差縫候時は先件之 御趣意を含み精々取鎮め談判之上彼方及
異變候節は無是非儀と 思召候右 叡慮之旨相立候様頼 思召候間宜
被差合御取計可有之事

切紙

- 一 永世安全可被安 叡慮之事
- 一 不拘國體後患無之方略之事
- 一 下田條約之外御許容不被遊候節は自然及異變候も難計に付防禦之所
置被 開食度候事
- 右之條々衆議可有言上事
- 一 衆議言上之上 叡慮猶難被決候は 伊勢神宮 神慮可被伺定儀も可
有之哉之事

○以上二番三月廿六日光成卿建通卿俊克卿等行向去
廿四日書取と取替に相成候事

三月廿六日

都筑駿河守病氣引籠中大久保大隅守一人勤之處當節 御用多に付岡部備後守臨時非常之御用相心得候様申渡候旨堀田備中守申渡候事

「墨夷一條に付人心居合方之儀深く被爲惱 叡慮候先達關白殿太閤殿之御書取を以被 仰出早速關東之差出候處人心居合方之儀は關東において御引受被成候に付被爲安 叡慮候様被 仰越候處猶又堂上方御建論之儀も有之候に付右御書面類昨日御渡被成得と熟覽仕候處何れも憂國深忠之御赤心之夫々被仰立候儀と感激之至御座候去右群議之趣に由は却一層被爲惱 叡慮候儀共奉存候間夫是委細之事情川路左衛門尉淺野和泉守岩瀬肥後守等是迄夷人引合等仕候もの共に付關白殿太閤殿御初其外可然御方々之御直に言上爲仕度廉々も數多有之其次第により昨日御渡有之候 奏議之諸卿へも一々無殘處御詰問をも蒙り巨細之事情

相委悉し聊も御隔意なく何れ之道國家之御爲宜敷始終被爲安 宸襟候御場合に歸し候様仕度奉存候右は舊來之御作法も有之不容易御儀には可有御座候得共 御沙汰之如く國家之安危に係り候御一大事に付非常之御取扱を以前文御直言上等之儀何れ之御場所成共罷出御手数不相掛只管御大事之御用談貫徹仕候様仕度左候は、諸大名を始闔國之人心居合方は勿論外夷之事情後來御國威御交張之御見据往々奉休 宸慮候大略迄十分に奉言上候様仕度奉存候實以國家治亂之岐路億萬之生靈生死之堺何分にも非常之御取扱厚く被仰立被下候様仕度候事

此一番廿二日行向之時備中守より差出但有差間之筋に付廿四日行向之節及返却不及沙汰且蠻夷不可敵形勢書一番有之是は兩役中に抑留也

三家以下諸大名再應衆議言上有之候へは右之趣 聞食候上にて御決答

可被遊 思召に付夫迄之間は今般條約之趣迎も御許容は難被遊との
思召候事

○右三月廿六日三卿行向之節川路出頭此書付所望但御趣意少々相違に
付不相渡して持歸内評之上去廿日廿六日等之書取にて御趣意相分有
之候間更に不遣由四朔早天自武傳申達了

去月廿六日御預り申候川路左衛門尉相認候一紙之趣關白殿太閤殿
へ申入候處同二十日御返答并廿六日之兩通に相分候儀故不及書
添之旨被命候間此段申入候事

四月一日

廣橋前大納言

久我右大將

坊城中納言

別紙堀田備中守へ可被相傳候事

四月一日

廣橋前……

本多……殿

去月廿六日御預り被成候川路左衛門尉相認候一紙之趣關白殿太閤殿
へ被仰入候處同廿一日御返答并廿六日之兩通にて御分り被成候儀故
不及書添之旨被命候旨被仰下致承知候事

四月朔日

一紙被返下致落手候事

御別紙堀田備中守へ相傳候様被仰下致承知備中守へ相傳候事

四月朔日

廣橋前大納言殿

本多美濃守

三七 京都風聞書

安政五年四月一日—三日

四月一日

歸府之儀御沙汰御座候節暫出立見合申度旨申上置候處猶相伺候廉々御沙汰にも御座候に付おは 勅答被 仰出候砌早々歸府可申上旨被 仰下候趣にも御座候事故此節御暇被下候様仕度奉存候事

四月三日堀田備中守御暇參 内之節兩役被渡

四折

蠻夷覬覦之時節に付神宮并京師殊更に警衛之儀就中武備相整候可然國持之大藩早々被 仰付候様被遊度於京師は先年并伊掃部頭以下被 仰

付候へ共猶又右御警衛防禦之御備如何様被 仰付候哉平常御手薄之事故御内評之儀被 聞食度候事

但自 神宮祠官申立之儀も有之候間早速御沙汰に被及候様 思召候事

四月一日御祈奉行被伺定夫々下知如左

今度墨夷驕傲企望國家之大患誠不容易可係闔國人心之歸向深被惱 叡慮依

神明冥助不墜 皇威彌天下泰平 寶祚延長萬民娛樂之御祈一七ケ日一社一同可抽丹誠事

一神宮并伊勢宮以下廿二社來十一日御祈始
熱田以下十社來廿一日御祈始遠路着到次第

内侍所 伯刀自

廿二社

| | | | |
|-------|------|-----|------|
| 伊勢内外宮 | 上卿 | 石清水 | 廣橋 |
| 賀茂下上社 | 傳奏 | 松尾 | 伯 |
| 平野 | 西洞院 | 稻荷 | 伯 |
| 春日 | 南曹 | 大原野 | 伯 |
| 大神 | 吉田 | 石上 | 御祈奉行 |
| 大和 | 吉田 | 廣瀬 | 吉田 |
| 龍田 | 御祈奉行 | 住吉 | 勸修寺 |
| 日吉 | 座主宮 | 梅宮 | 是定 |
| 吉田 | 吉田 | 廣田 | 武傳 |
| 祇園 | 廣橋 | 北野 | 寺務 |
| 丹生 | 御祈奉行 | 貴布禰 | 賀茂傳奏 |

十一社

| | | | |
|-----|-------|-----|-----|
| 伊雜宮 | 神宮上卿 | 熱田宮 | 武傳 |
| 香取宮 | 一條殿 | 鹿島社 | 鷹司殿 |
| 諏訪社 | 武傳 | 大社 | 柳原 |
| 熊野社 | 三山檢校宮 | 宮崎社 | 吉田 |
| 宗像宮 | 吉田 | 香椎宮 | 同 |
| 宇佐宮 | 烏丸 | | |

以上御幣料白銀一ヶ月十枚ツ、自御神事料之内御奉納如先年

四月三日夕武傳堀田へ行向之時口上書

御警衛之儀相整候迄に若夷類近海に渡來之節は防禦警衛手配有之度存候萬一跡廻りに相成候は深恐懼候御助才無之儀に候へ共此段兼而御頼申入候事

四月三日

光 成

右は同日現任公卿予到定功卿十六人連名を以有申上之旨又散位雲客にも有同様之義被及此沙汰乎

七ケ

延曆 園城 東大 興福 東寺 仁和 廣隆

南都七大

東大 興福 西大 元興 大安 薬師 法隆

三八 公卿勅使發遣の件 安政五年四月

國祭 宣命被戴辭別上卿予消息 宣下前日大内記へ下知嘉永四年之例 夷族有覬覦之念於東武應接等之事情誠

皇國之大患深被惱 叡慮依 太神之冥助早洗滌 神州之汚穢彌天下泰

平國家安全 寶祚長久萬民娛樂之儀令載 宣命辭別

右仰詞 忠能調之伺定了

天皇我御命尔坐掛畏岐賀茂乃皇大神乃廣前尔恐美恐毛申給者久申久大
神乃助給比護給尔依氏天皇朝廷者平久大坐氏食國乃天下無事久可有止
為奈常毛進無留字都乃大幣乎官位姓名尔令捧持氏阿禮已阿禮乎止走
馬進免留止恐美恐毛申給者久申 □別氏申久頃年以來諸夷屢來留中毛
墨夷者伊豆乃下田尔來利内覬覦乃心乎懷岐外交乃好乎結比港口乎開
岐商館乎建乎乞求其應接乎聞食須事情甚驕慢氏禮毛無久厭毛止無
志寔尔皇國乃大患天下乃深憂底尔志 安危乃間治亂乃本者奈禮不可忽留時奈
如此久國體毛拘奈須止危難乃到古止 朕菲德尔依氏所致加敬神乃淺岐
所致加寤毛寢毛危美給比懼利給比仰氏祖宗乃道乎念比俯氏億兆乃情乎
察志朝尔群臣止議利夕尔 叡念乎凝志給布掛畏岐 大神此狀乎平久安

久聞食氏厚御恤美廣御助乎垂給比昊天乃慈雨乎降加須如久早久神州乃汚辱乎洗比給比滌岐給比氏比自今以往天下彌泰平尔國家益安全尔寶祚長久萬民娛樂奈良辛古止乎護幸給倍止恐美恐美毛申者久申
安政五年四月

明後三日已刻堀田備中守本多美濃守同伴參 內備中守可賜歸府暇被仰出候仍申入候也

四月一日

正 房

四月卅日

伊勢公卿 勅使關東 御內慮濟來武傳廣橋御直に言上之旨届○廿一日申沙汰胤保朝臣被 仰下

三九 擬答米國々書大意

擬答墨國書大意

癸丑歲貴國大統領函書曰、吾合衆國規矩定例嚴禁各官插管別國政禮、水師提督彼理書亦曰、本國律例各官不管本民之教、何況能亂別國之政乎、我據斯語以爲貴國信義深厚、特邁他國、故有橫濱之約、今承其攸道如某事々々違犯我邦政禮、而與前函書相反、我甚失望於貴國、又承、或有泰西諸國遣艦來伐貴國爲調護彼此、深謝其意、然我邦未嘗得罪於泰西諸國、安有無故見伐之理、若肆其暴雪、妄無名之師、是卽豺狼也、曩者我不知英人之黠、約之互市、今據貴諭、始覺爲真豺狼々々之國、我將竭全國之力而拒之、不煩貴國調停也

四〇 雜記

雜記

或謂余曰、昨者聞祭酒林某御史津某奉西上之命、遑遽登程、未審其何故意、是

幕廷諸臣恐

天朝不聽墨人欲使其密ニ泥ス斯ト篤ル爾來栖京師故遣林津二使爲渠祈請也我邦
亘古來未曾聞膺虜來栖 輦轂下且據墨使巴ハ利リ斯ス所說密泥斯篤爾者位與
其國宰相俾使梁果在京師必求參 內又必禮匹三揆是不可尤大者也卽有
御覽殊俗之命幕府亦宜上書諫止以正內外之別而却爲膺虜祈請何也此事
得允准則赫々神州論爲膺鄉不得允准則有嫁洋禍於上國之嫌得與不得並
將不能道負國之罪名兩使西上到底叵曉之事也余答曰是所謂以宵人之腹
揣君子也子試思墨使所謂除來栖京師之外營邸西城下築城橫濱開廠品川
等諸件皆是要衢有一事無後患者邪方今幕府方傑林立焉莫一人覺其爲諸
牛皮大之故轍也以余所考兩使西上恐與子意相反蓋是密奏墨夷之終爲我
患而請拒絕之則及干戈亦不可測安得不承 宸衷前三年甲寅春墨國水師
提督斐理之率戰艦濫入內海今幕府在制故相福山侯遣祭酒林某等與之會
盟許和親交致條約書而約書所載咸出一時權宜事理多失當者故相悔恨有

意釐革而不果行佐倉侯代掌外蕃事適墨使來言有二重大事非進見不敢陳
今相察有奸謀召問得其詳實豁 巨盈之侈心故遣使密奏耳意謂誠得 聖
旨咎其所謂與往年大統領函書背馳焚棄約書而布告絕和之意於天下則癸
丑以還萎爾士氣一齊振起假令烏舶蔽海掩至摧之何難凡治沈痾非以峻劑
發動不得霍除今相措置正合良醫處方子不知而妄議可笑也或曰子言誠然
々闔外之事將軍所專若每事稟 旨違古者推轂之義特恐自是 皇威日隆
而 將權日銷呼是何事 皇室之尊卽將家之福奚有
皇室不尊而 將家享福者且
皇威所加人神咸奮我知黠虜之低首搖尾乞憐於我不出數月矣子刮目埃之

四一 江戸風說

安政五年五月廿一日

安政 五 五廿一見

江戸風說

中山忠能履歷資料卷五（安政五年五月）

一 關東之事情篤と勘考仕候にアメリカえ對談致し候儀何分變替難仕候に付先條約調判之期限を延置其上にて諸大名假令存寄有之申立候共如何様にも説得いたし公議御同意に相成候様仕候積り夫には閣老のみには御家門を始溜詰并國家邊え押れ、不申候に付徳川家隨一之重臣彦根候を大老職に任し是を第一に抱込候て佐倉上田兩侯取續き諸大名を説得致し候上にて御三家をいやおふなしに説き付不殘公儀御同意に相成候處尙又上京是非共蒙 御許容候積り

御所にて何と被 仰出候共腹を居て申乞時勢返る事なく位に 御許容に相成候處にて矢張假條約之通にて先貿易を開き和を^先尤として戰を追ふ決定之様子に相聞申候京師に對し候ては甚不相濟事に候へ共此度僉議大方右之様成へし必定此成行前文之通に候長き事も無之六月中には相分可申候

一 三家以下諸大名之衆議被 聞召度との事に候へ共廿五日登城有之被仰

渡之邊に中々營中に衆議杯と申儀には參らす席々にてこそ、宅へ寄合内談致し候位之事に氣強く申候者も時勢を考出不申ぐず、寝言同様之事に内々内々と申居位之儀に候

一 廿四日備中守殿御宅應接後廿六日蕃書調所之掛り役々罷越應接期限延し談し出來當^{三本}二日出書相渡兩三日中下田に中歸りに極り候由尤密事なれば御胸中限りに御承知置可被下候

七月廿七日迄なり

右徳大寺 沼尾等より借寫五月廿四日

四二 有志よりの來翰

安政五年五月廿一日

一 有志之士より今廿日到來之書中

然は唯今東方之眞説と申候承申候彦根侯御引込亞人は下田に相越候振に乘船廣東に相廻り暎夷之軍艦を募り浪花海に乘入

京都を劫候内合に於此程江戸を退き候由尤役人之内内通致し候者有之歟之由越前反心猥に和を唱へ剩御内席を説得有之由大諸侯方之内五七家は到て手強く正論有之甚混雜に御座候右は昨日到來之書中に於極々新聞不取敢浪花海之手當專要決可驚儀に無御座候兼覺悟之前に付警幾千艘渡來百雷之墮る如く大炮打掛候共於京師は始終御一貫飽迄御嚴格之思召に無御座候は逆も難相成儀東方においてはしらぬ顔に於危急到候迄送り候内存歟最早月上旬には不時に乗入可申遅くは中旬に到り可申是も兼々申上候如く眞坂之節に御撓み有之候は萬代之御耻辱國威も夫迄と御思召切り可然驚愕せしめて國家を奪掠致し候は外夷之常情實に御大切之場合御案思申儀に御座候

一何れ事起り候は、京師を諸藩を直に被爲召警衛被仰付に無之候ては危急之間に合不申其節は何れも臨時平日之御定則を御離之御一大所置御大切に可有之尤も無之候ては機會を失ひ可申候

一於關東 京都和親御不承知故に不成と打明け亞夷へ斷候に付右之場に到り申候かりそめにも 皇都近海へ夷賊爲近寄人心爲動品により奉惱宸襟候に到り可申歟征夷家之任如何眞に残念難堪次第に御座候

右實説を承り何は扱置一應爲御知迄如此折角御用心專一々々近日攝海以來候は無疑千慮御萬考御覺悟奉懇祈候御有志へも宜御通し可被下候

尤大秘密御他言御無用東坊杯へ相洩候は以之外之次第に御座候

十九 申下刻

右久我に可見五月廿四日

四三 流行鄙歌

安政五年

無イくつくし

ないや無イしよ事も無イ此節騒きの亞米利加使節諸役人中手出しが無イ、され共其儘捨置無イ、使節之了簡わから無イ、生死の沙汰はまだ知れ無

イ、京都の評判きまら無イ、備中さつはり用立無イ、堀田は御腹をなせ切ら無イ、それではおまへの身か濟無イ、屋敷物入りたまら無イ、家中の肝玉落付無イ、水戸の奴かうわさか無イ、屋玉の隠居はうそて無イ、奉行や目付は用立無イ、鈴木の噂はかたで無イ、それ見ろ臺場は用立無イ、智者が有つても見出さ無イ、いつも役人目が明か無イ、林はひとりて云わけ無イ、所司代閉門また濟無イ、上方表の取沙汰は容易な事ではござら無イ、佐倉はいまた歸ら無イ、川路の我まゝほうず無イ、なれ共馬鹿ではござら無イ、遠藤の命も長持無イ、伊賀どのうわさはさつぱり無イ、堀田の天窗はおしてが無イ、脇坂少しも口出さ無イ、能いかわるいか分ら無イ、御觸がさつぱりきまら無イ、西丸御跡はまた出來無イ、尾張か紀州か極ら無イ、御子さんいまだにまだ出來無イ、十三代目だが覺束無イ、老中や年寄氣が付無イ、上の評議は定まら無イ、きゑんのはなしは出そく無イ、とてもお金は出そうも無イ、上ては少しも察しが無イ、どふするつもりか分ら無イ、士計りはつまら

無イ、是ではさつぱり咄せ無イ、町人は段々喰れ無イ、諸色の値段は下げさせ無イ、武家はますくつまら無イ、金が有ても出してが無イ、質屋はさつぱり動か無イ、イギリスいまだに來ら無イ、畜生の登城は有たためしが無イ、こんな無法を留てが無イ、町人御觸をなせ出さ無イ、芝居の普請はまだ出來無イ、出來てもどうせ見てが無イ、よせや見せもの入が無イ、遊女屋すべて客が無イ、何商賣も買人が無イ、花見遊山に出てが無イ、なんだか少しも春めか無イ、質屋は具足を又取ら無イ、西洋流はやめさせ無イ、異國の取沙汰まだやまない、水道の普請は埒明ケ無イ、馬士や車力はつまら無イ、此節流行寺無盡取つた咄がござら無イ、こんな不埒をなせ留ない、役人了簡分ら無イ、清水の御殿は埒明ケない、家來のやつらはつまら無イ、小菅の盜賊まだ知れ無イ、日本^兜兜りおあぶ無イ、貳分金の融通少しも無イ、壹朱の金は位が無イ、なせか世の中つまらない、おもひいだせば氣がきか無イ、ぶつさき羽織に紋の無イのはござら無イ、なんのためだか分ら無イ、刀はいづ

れも短かく無イ、其のくせどいつも手がきか無イ、見かけ計りじやつまら
無イ、神の御罰は仕方が無イ、伊勢の神風なせ吹無イ、帝ミカドの御苦勞勿體無イ、
彼是いふのも氣がきか無イ、しやべり出せば留どが無イ
公家は武士ぶしは商人醫者大鼓
いわずと知れたぼうずどろぼう

中山忠能履歷資料 卷六

一 和宮御降嫁に付老中連名書翰

萬延元年四月

以連名得貴意候然は公方様御年頃にも被爲成候に付御縁組御内意被仰出
候尤御規も被爲在候事故今般は
皇女之内御縁組被遊御整度御内存に被爲入候於拙者共も奉願度儀にも候
得は早速致評議候處和宮御方御年比にも御相應に付至極可然奉存候得共
先般有栖川帥宮御縁組御内意も御座候事故右を御沙汰止と申事に相成御
都合宜御縁組被遊御整候様不容易御譯柄にて御斟酌之御事に候得共御勤
考取計可被下候左候得は此上公武益御一和之筋を御國內は勿論外夷迄も
差響候得は第一國家之御爲と奉存候間厚關白殿に被遂御内談早々相整候
様御差計可被下度以上

安藤對馬守

脇坂中務大輔

内藤紀伊守

久世大和守

酒井若狹守様

猶以

當今御養女に被爲成候方御通合宜候間其御合にて早々御取計可被下候
和泉守儀は長病に付致除名候以上

別紙之通年寄共より申越候に付入御覽申候御程能御整相成候様御考量
之上御沙汰被成下度奉願候事

四月十二日

忠義

以上の通 月 日從若州殿下へ差出候よし

中山忠能履歷資料卷六

靈元上皇姫宮八十宮様御事七代將軍家繼公有章院殿と號右御臺所に御治定御下
向之旨正徳五年九月被仰出候然處翌六年家繼公卒去依之御下向は無之乍
併御配偶被 仰出候事故に而八十宮様御一代之内關東より御賄料千五百
石被進之候事

此一帯は殿下にて御添と建卿寫にあり矢張若州と添かともゆ

右書付自若州内々被爲見候書取之寫

以上五月朔日殿下持參被入 叡覽同二日兩役參集被 仰出召御前被見下
可存意 御沙汰 兎角 叡斷且御本人思召可有如何哉申上 思召御一紙
拜見如左 同月四日被遣之御使建通卿

二 同上に付宸翰

萬延元年五月四日

今度從關東内願之件右書狀公武合體之邊に而難默止候得共和宮には已
に有栖川宮御内約も致候事今更及違約候も名義如何哉且 先帝之皇女義

理合も有之斟酌之事に候且又和宮いまた幼年且女子之心中に當時關東には蠻夷來集故只々こはく被存候事も兼而咄有之是又不便に存候右等之次第故折角申來之旨無心之理申候も如何歟熟考候得共實に無餘儀邊に候間此縁は先見合度候殊に一昨年來蠻夷邊之事に付ても何か行違之廉も有之於關東も異心有之様に心得毎に公武合體之儀申立候右等に對しても如何に可聞取哉と夫も深心配候

〔元來蠻夷之儀は猶豫中之事故於公武之間聊も無隔意候間〕

只 關東と之間は實に無隔心あんしる事は決り無用候蠻夷之儀に於てはいつゝ迄も不同心に候夫故先猶豫之事に候間

前文難去次第且日夜苦心之邊一通り書付申聞候萬事宜差合從關白程能可及返答候

〔再應可申來候は、又々可申談筋も有之候〕

〔決り返答振不廉立候様可取計頼存候〕

三 所司代酒井忠義より關白宛書翰

萬延元年四月

五月五日

建卿云昨日殿へ御答畏承尙若へ仰之旨可申入由御受於御前今日被申

上候由也

一若殿へ來候一帋五月四日以同卿可被入御覽忠へも内々可一見置 仰之旨被見

如左

四月十二附之御書狀披見候然は公方様御縁組之儀に付申進候御内意之趣早速關白殿に具に御内談及候處至極之御事に被存上一日も早ふ御整相成候様致され度は被存候得共有栖川帥宮御縁組御沙汰止之御都合も有之其上兩役に勿論衆議之邊にも可相成哉何れに追々之御手續にも次第能御運ひ不相成候は却る御手間取にも可相成卒忽に 御内奏と申場合にも難到且此節は葵祭御神事中御内奏も難被成旁御遅延に可相成尤是非御整に相成候様御丹誠被成候從委細被仰越候趣早速に進上聞候處無御據儀に

は被思召候得共右御内意御整相成候得共一般御一和之筋を辨候得は益御安心之基に付何と歎御勘考之上尙折入厚關白殿へ被遂御内談内外御都合宜御整相成一日も早ふ御吉左右被遊御承知度於拙者共は猶更奉願候得は被仰越候譯柄は御尤千萬無御據事とは乍申御手間取れ相成候は此節柄別亦御不都合故天下之御爲何れにも萬々御都合宜速に御整相成候御運ひに御周旋御座候様いたし度右御報旁申進候以上

四月廿三日

安藤對馬守

脇坂中務大輔

内藤紀伊守

久世大和守

酒井若狹守様

尙以御下向之處年内之御運ひに相成兼候は、來早春之御下向に相成候

亦も宜右も御合御取計可有之候以上

四 橋本實麗内話

萬延元年五月

一 實麗卿内話一件昨日自建卿内旨之通も内々實愛卿へ申出可拜見被示候間入夜拜見候由何分此儀は、月十四日自若以本多孫左衛門申越十日間違之旨申來候節に觀行院始御乳人深愁歎 宮にも御歎何れとなれば尼に成共成との御事且具親朝臣兩度入來不審之儀内府宣諭卿へ内話事建卿話之内政通忠熙實萬等公卿に被仰遣候へ共矢張落飾に押付候間此度申立掛候に付同様押付け可申哉扱々難澁之由承候へ共夫は譯違先雖攝家臣は於宮は先帝御女當今御妹之儀且帥宮 御縁組も御治定之御事に候三公等は事之行違も有之候へとも少つゝは事に係り候儀も有之一切無實とも難申歎之處同様て被存候ては甚以不相濟存候處五日再面會にて右は女房衆へ御沙汰之處右等被申候由を御沙汰に付話被致候由被申直候甚不得

其意由被示予答右女房話之旨御沙汰と申儀は五日朝建卿話有之よし申入
扱再之御理に可相成候へ共何分江戸を申來候は公武御合體御一和之爲と
申儀を專一に申立候間唯御理計にては夫にては眞實御一和にては不被爲
在或は臣下之中不同心之者有之より御理なと申出し又々一昨年來之如
く可及動候間何ぞ御理の題名麗卿には所存無之哉予一分にて尋候處宮
方へ被爲成候も宮參内婚禮之上同伴歸家之事に候間大樹にも上洛にて
同様之進退に相成候様と被仰候は、可相止哉之由被示予云當時之儀夫は
御難題に可當候外に無所存哉尋之處先年來蠻夷之事數度叡慮被仰遣
候得共不奉遵候如舊法急度拒絕にても出來之事なれば又々日本への御
故申上様御勸め申方も有之候様の物に候へともむさと被任所望候にて不
義之名義も難立宮へ申上様も無之心痛之よし也

五 四夕從若殿へ差出候由

内啓仕候益御清寧奉賀候然先般申上候御縁組一條委細御承知之義には
御座候得共尙内々御沙汰被爲在候付何れにも當年中御婚禮之御運ひに被
遊度思召其次第を來年は上様御縁女様共御十六歳に被爲成御縁女様表向御
十四歳御内實は
御の由然處御十六歳は御年柄御婚禮等は被遊御嫌奥向も品々差支候様子
に候儘是非々々當年に御引上御下向御婚禮迄首尾能被爲濟候様貴所様迄
私々厚申上是非共右之御運ひに相成候様御骨折可被成旨御内々御沙汰被
爲在候右之譯柄何とか御勘考之上九條殿の折入御内談被成下是非當年御
下向御婚禮迄御整に相成候御運ひに不一方御骨折奉願候彌當年御下向迄
相成候得は來月中旬遅くも下旬迄には御内意御整之御吉左右被仰下候
様に奉願候上にも貴所様之御挨拶被遊御待候御次第に付吳々も不一
通御骨折奉願候右は誠之御内沙汰に付私一名を以極内々早々得貴意候就
ては一通厚御合御取計御座候様に吳々奉願候以上

四月廿七日

久世大和守

若狹守様

尙以時候御保護專一奉存候御急き之御内命吳々も御含返す御沙汰御座候事故不取敢早速奉申上候義に御座候間何分にも御所向折合宜様御勘之上思召之趣相實候様偏に祈念仕候當年御下向と相成候得は來月中旬遅くも下旬比迄には御吉左右被仰下無御座候は御召物織立を初御道具御普請等品々御手都合御座候間一方厚御含之上御周旋希上候以上

右一帛

以別紙申上候和宮御方之御氣分柄御容顔之様子御取廻し之邊迄何分にも御内々早々御聞つくろひ御探鑿之上早々被仰下候様に奉願候以上

四月廿七日

右一帛等五九内々久々被見是は未被入 御覽由に候

七日觀行院參内和宮御使且自分願等之有御對面書取二通有之此節建卿へ御内話有之广司已下落飾の説被伺候處左様之事は誰も不申由有之仰大典侍長橋も侍坐にて同様申云々如何々々
八日實麗卿面會建卿虚言を被申由深怨被述候光成卿公能卿へも被申置由也不便々々建予實等召御前予不願恐述所存了

五 久我建通より正親町三條實愛宛書翰

二通 萬延元年五月九日

九日自實愛卿被見

極密意中申上候昨日之御次第只昨日は茫然と仕而已にて御坐候退出後篤と思考候處何分御差向之義に候間甚心配之事に候毎々申上候通去四日被召御前御直に御沙汰には
今朝女房へ書取被爲見候處女房衆大驚動にて扱々難儀なる事出來宮に

は御氣毒に候併ヶ様申出候ては三公落飾同様之儀從東武申張候て何程御申遣に相成候ても此儀再應申張候半左は、扱々難儀なるとの言上之由右玉音は只今之耳底に残り有之然る處昨日朝小子一人御前之砌にも甚御心配之御様子に女房は不申出儀上にも御沙汰無之様と被仰示候に付甚以心配なから打明て去四日之事伺候通申上候得は實に有之候と伺候て安心は仕居候へとも又々爾後三人出席之砌矢張何故ヶ様に間違候哉御不審之御口氣に候小子餘程其節に一言可申上哉と存候へとも自然玉辭被窮候ては却而不敬千萬只々一人失言の罪を身に引受け退役迄も可相願と一決仕居候處御兩卿段々御申上邊にて今日御對面と迄には至り候全御助勢給故と畏入候併小子退出後も何分御差向之儀に證據も無之儀に候間自然御兩卿にも少しは御疑念被爲在候半哉夫も心配仕候間有様申上度存候元來從先年退役も毎度願上候得共不被許任槐之義も御延しに相成り兩事共に一身難澁は申迄も無之候得共何分深き御憐愍と相忍ひ只今迄勤來

候處今度之通實に難申上義なから御兩舌と奉察候間小子は何事も承知之義なから若他人にヶ様之御振舞被爲在候は、ばつと世間へ聞へ英明も失ひ甚た歎ヶ敷存候扱今度之一件も中々不容易願事に候間是に付御案内之通天下一致て相成様且天朝之御英名萬國迄も輝き候様と存候は此時より外には無之失之候へは又々何程耻辱を被爲請候半哉と一心之悲歎より忘吾身勘考而已に係り居候處手始めより御兩舌など有之臣下の言路不貫通候ては實に歎ヶ敷存候若し婦人之方を被斟酌帷幕之臣の大事不成就に至り候は英主の有間敷儀ならず哉只々歎息仕候小子之浮沈も此邊歎に被存候昨夜來苦心之餘り胸痛困り居今日も學院は不參仕候義に候決て小子一身にかゝり候て悲歎之譯にては無之朝廷之御威儀難立と而已に候小子は何程汚名を受け候共少も不苦儀に候餘り、任歎息内々申上候此意味不苦候は、小子之心中被推考御前之節御申上置可給候中山殿へも此一昏は内々御見せ置可給候早々頓首

昨日は拜面畏入候御草臥存候彌御安全令賀候然是一件彼是と御配慮に相成恐入候先々少は模様付候へ共今日之處如何程哉と存候何卒善惡共に一寸御示可給候只々心配且迷惑痛苦仕居候嗟呼々々と歎息而已に御座候別紙内々入尊覽候小子心中御推考可給候決て只今退身仕度と申義なとゝには無之既往之事なから尙又將來をいましめ度と心中に存候事に候少は此處にて御思案も不給候はねはケ様之大事策略之差支に相成候儀に候間其邊申上置度存候事に候小子の身に係り候義故直に申上候得は何歎憤怒を挟み申上候様に御取上げに而は心中之相違に相成候間尊公御前之砌に御申上給候は、御鹽梅も可有之と存候間一昏上候事に候此まゝ御覽に相成候も不苦候尊公思召次第希入候餘り書過歎と存候へとも是程ならては不融と存候早々如此候也

五月九日

建通

新大納言殿

内々

六 正親町三條實愛より中山忠能宛書翰

萬延元年五月九日

拜見御安全恐悅候抑昨日御苦勞存候事に候難物困入候事共に候只今此一冊一昏御到來御傳畏拜受候猶直に建卿へ可返却候扱今朝建卿が一昏一通到來任便差上候彼卿頓作には無之事分明長大息候
一明後日若州不參候ても御内慮通達調候否之事は前中武傳退出に付不尋申候

一今日彌實麗卿御前被召薄飭御引言至極御通合よろしく被仰解候久殿へは委細唯今申入候明後日拜上萬々申上候何分程能御申解有之聊は安心仕候

一別紙久殿書取入御覽候今日は先不申上候一應貴君へも申上久殿へも今
一應申承候上と存候今日は少々相合申上置候御覽後御返し希入候
右荒々申上候也

五月九日

實 愛

中山殿

七 久我建通より中山忠能宛書翰

萬延元年五月十日

昨日寛拜畏入候彌御安全恐悅候然昨日は存外之義只當惑茫然と仕迷惑
此事に候全尊公正三等御明決にて小子も安心仕候無左候ては只々冤罪而
已にて進退も六ヶ敷存次第に候先々程能畏入候元來ヶ様之事は間々有之
義なから行末 皇國之御爲萬代迄も英明輝き候時と夫而已に係り他事無
之義に候處ヶ様手始めより齟齬出來にゐは實に心配仕候小子は何事も承

知仕候事に候得は何等之儀に相成候とも頓と不苦候なから他人へ昨日如
き御振舞被爲在候ゐは世上へ流布候ては實に 英名之損しに相成恐入歎
息仕候事に候右に付小子存心書一昏正三へ差出置候可相成は 御前之節
申上被吳候様少し後來の御爲か哉と不願恐申上置候定て自彼卿尊公へも
被上候と存候御覽可給候扱又昨日此書狀留守中來候可笑候と存候又々御
勘考一助哉と入御覽候御序有之候は、正三へも御見せ置可給候跡は小子
へ可返給候扱此一冊參候入御覽候是亦正三へも御見せ可給候外に昨日御
約二通寫さし上候御落手可給候也

五月九日

建 通

中山殿

八 和宮御降嫁に付酒井若狹守より關白宛再應

願書

萬延元年五月十日

五十
若州殿下へ再願書付十一日殿下被入 御覽

和宮御方御縁組之御事關東より内々奉願候趣言上被成下候處御別紙御返答之趣謹々拜見仕誠以御尤至極之御儀迄乍恐奉存上候右は早速關東へ可申達筈に御座候處私一己之愚案を以再應奉申上候儀は誠以恐入奉存候得共一體此度之御一條は一時之評議等を以卒爾に申越候譯には決有之間敷全く公武之御間柄は申迄も無之天下之御爲を深く心配仕閣老共一同厚く評議を盡し大樹公へも再應伺之上深重之御注意を以て申越候と相聞申候間乍恐御別紙之趣關東に相達候共直様再應可願越儀は必定之儀と推察仕候兼も奉申上候通格段御急之御趣意之處遠路往復に時日を費し候段を實に心痛仕候儀にも御座候兼も閣老共より申越し置候趣も御座候間誠に差越候儀と可被思召候哉之段は深く恐縮仕候得共先つ私より奉願上度何卒殿下御汲取被成下今一應篤と御賢考被成下何とか被 仰上被下候儀

は相成申間敷哉偏に殿下御丹精を以て
主上にも程能御納得被遊首尾好御整に相成候は、無此上恐悅至極之御事
と於私も誠以難有奉存上候儀に御座候乍恐御返答之御旨趣愚昧之淺見に
は御座候得共左に奉申上候有栖川宮に御内約被爲在候處今更御違約に
は御名義如何に被思召候旨御尤に奉伺候併右は先達より來駈と承知仕居
候儀も御座候唯今御沙汰止み之旨被 仰進候共少しも御懸念は被爲有
間敷哉右等之邊は御模様柄御有様に被 仰上候は、却御安心之御場合
にも可被爲在御事と奉存上候何分未だ御結納も不被爲濟内は全く御内約
と申迄之御儀と相心得罷在候義故強々御名義を被失候と申御義には被爲
在間敷哉且 先帝之皇女に被爲渡御義理合被 思召候邊御尤之御儀とは
奉存上候得共關東御縁組之儀は既に顯然と御先例も被爲在候御儀併路程
遠隔之地に被爲成候段は奉恐入候得共御本人様之御奉養に至り候は却
る御手厚に被成進候御儀にも相當り可申哉御幼年之思召に諸夷來集之

邊只々恐ろ敷と之御噂も被聞食其邊御不便に被思召候と之御沙汰御親情
之處何共奉恐察候得共關東は諸大名多數を召連參勤群集之地に候間御
警衛之儀も自ら御行届に相成候儀に之深く御心配被遊間敷様奉存候何分
此度の御縁組之儀は則天下一體之御爲重大之御事柄に付右等之邊は何卒
程能御汲取御納得被遊被下候様奉願上度候猶又公武之御間柄聊御隔心は
不被爲有旨敬承仕乍恐於私は兼々 思召之程難有拜承仕居候得共何分一
昨年以來度々御使等往返彼是御往復之御次第も有之候儀に付天下一統御
一和之儀を顯然と相辨へ候儀にも至り申間敷哉其上此度之儀御斷之段申
進候は、關東年寄共迄も 思召之處深く心配仕候儀にも可有座哉其上再
三懇願仕遠路往返空く時日を費し候而已にも無之御押合御往復度々に相
成候節には其文中自然廉立候筋も致出來可申哉左候は却る只今迄之御
一和之儀も相響可申哉と深く心痛仕候依之不願恐懼私心底之處殿下迄懇願
仕候間吳も此上御賢考被成下今一應思召御伺被成下候様偏に奉希上候事

右十二日正三へ三浦持參整候様内頼且下官へも同傳言有之由也

十九日行向第一事之内談了

九 三浦七兵衛より披見の書翰

萬延元年五月

廿一日 御揃御安——抑別紙二通一籠等只今到來候間早々爲指上候
御一覽希入候萬々期拜話候今日御憚日存候間いかゝは候へ共先爲早速
差上候也

上

三浦七兵衛

乍恐以書取奉申上候

益御機嫌能被爲成 恐悅至極奉存上候然者過日殿下に被差出候書取之内
御尋之儀被爲在候に付尙又昨日別紙之通御答書被差出候間寫一通極内
々奉指上候何分程能相濟候様幾重にも御丹精之程猶又被奉願候旨宣奉申

上候様被申付候乍恐 中山様へも宜敷御傳被遊被下候様是又宜奉申上旨
被申付候吳も可然様御配慮之程奉希上候

一御二籠之内十本宛入

右甚如何敷被存候得共在所表より相廻候に付御前様 中山様は御壹籠
宛御内々進上被仕候併迎も〱召上りには相成不申様間御取捨被遊候
様宜奉申上様被申付候誠に御手敷之儀に被爲在候へとも中山様へ御傳
進之程是又被奉願候尤右は私參殿仕可奉申上候筈に御座候處種々多用
に御座候へ今日は參殿仕兼彼是延引仕候に付乍恐以封書奉申上候段御
用捨被遊被下度奉願上候以上

五月廿一日

○

先達る殿下迄以書取奉申上候内有栖川宮は御内約被爲在候處今更御違約

には御名義如何と被思召候旨御尤に奉伺候併右は先達る以來暁と承知
仕居候義も御座候へ唯今 御沙汰止之旨被 仰進候共少しも御懸念は被
爲在間敷哉之旨奉申上候處右暁と承知仕候と申儀は如何様之儀に候哉奉
申上候様御尋之趣奉畏候右は風聞探索之儀に御座候間其節顯然とは不奉
申上候得共御尋に付風聞之趣左に奉申上候

一體有栖川宮は御内約之儀は鷹司入道准后殿御當職中達る御内命も有之
於有栖川宮も無御據御請被申上候由之處同宮には下地御勝手向甚御不如
意に被爲在此上 皇女御入輿相成候へは御暮方誠に御難澁之御次第之旨
には御家來共實に心痛罷在其上 和宮御方には御實年丙午之御誕辰に付
世俗一般丙午之妻を忌み其夫たる者多く疾病に懸る之由夫も亦丙午之誕
辰に候得は其害無之却る大吉之由唱申候義には自然有栖川宮にも右之邊
御聞込に相成居候哉 同宮にも最初は無餘義御受には相成候得共内實は
甚以御迷惑之御様子には何卒 御沙汰止みに相成候様被成度由且 御沙

汰止みに相成候は、御跡御縁組之處内々攝家方息女之内聞繕も有之哉之由且又於關東は丙午之御相性大吉之上公武之御一和天下一統奉仰候儀と深く御懇願之儀尤而兩三年前より世上にも公武之御縁組も被爲在候は、誠に永世迄之恐悦と夫而已相願居候事之由右は風聞探索之儀には候得共無相違相聞候間寤と承知仕候奉申上候儀に御座候右體俗諺にも其夫懸疾病杯申唱候儀を押御取結び相成候も末々迄御氣懸り之御事と奉存候付 御沙汰止みに相成御誕辰御差支無之方御縁約御取結相成候方乍恐御双方末永く 御安心之御筋と奉存候勿論遠方へ被爲成候段は奉恐入候得共畢意御所之替り候迄に御産母御始是迄御附之女中等も御附添申候儀に候得は御大切に御奉養申上候儀と奉存候事

五月

一〇 和宮御降嫁に付老中より再應願書

萬延元年五月廿六日

以下四通 六 六久被傳寫

久世大和守

内藤紀伊守

安藤對馬守

上包

御趣意書之御寫謹而拜見仕候處御内々御沙汰之趣乍恐御尤至極之御儀と一同奉畏候儀には御座候得共一體此度奉願候儀は一通り之御次第にも不被爲在大樹公にも品々篤き思召も被爲在候御事故右之邊をも奉伺私共に御坐候も深く奉願候儀に御座候間御内沙汰之趣に寄乍恐御請奉申上候一和宮御方は已に有栖川宮へ御内約も被爲在候御事故今更御違約に相成候は御名義如何哉と 思召且 先帝之皇女之事故御義理合も被爲在御斟酌之事に 思召候旨乍恐御尤至極之御義には御座候へ共一體於有栖川宮御内實格段御懇願被成候上 御内約に相成候様にも兼々不奉伺候儀且未だ御結約も不被爲濟御儀に被爲在候御事故全く御内談中之御

儀と奉存上候間御名義之邊深く御配慮被遊間敷様奉存上候且御沙汰之通御義理合も被爲在候 皇女にも被爲渡候間御下向相成候は、御奉養之邊は幾重にも御手厚に相成候様私共十分に丹誠仕可申候間其邊は却る被爲對 先帝候も御追孝之御義かとも奉存上候

一和宮御方未だ御幼年に被爲渡且御女子様之御心中に當時蠻夷來集之邊只々剛く被 思召迄之義兼る御咄しも被爲在御不便に思召候と之御親情之邊誠以御尤に奉存上候へ共蠻船幅之義は全く貿易を願候儀に而只今鬪争を求め候様之儀に而は更に無之尤兼る條約も相立有之此上趣過て致次第にも無之萬一兵端を開き候様之儀有之候御共固々御嚴重之御警備も有之候上諸大名へ被命十分に防禦も可有之候間強而御配慮被遊間敷様奉存上候

一一昨年來蠻夷邊之事に付度々御往復も御座候事故此度御理に相成候は右之邊へ被爲對深く御心配被遊候へ共公武御間之儀は實に御隔心不

被爲在候旨誠に難有御思召之處謹而感佩仕候 公武御間柄之儀は關東に御座候も固より御崇敬を被爲盡候 思召に御座候へ共御國中は申迄も無御座外夷迄も此上尙更御一和之邊顯然と奉仰候様被遊度思召候儀に御座候間此度之御縁組龜筮之御吉兆而已に無之必竟一天下之御治道第一之御事にも御座候間私共に御座候も偏に奉希候事に御座候一蠻夷之義に於はいづく迄も御不同心に 思召候と之儀是又御尤至極に奉伺於關東も大樹公御始御政務に携り候者共一人も外夷之交易を好み候者は無之候義只々今日之場合懇に貿易を願候儀に付無方に此方加征討候譯にも無之余儀御猶豫中に相成居候儀は一昨年以來度々申上御叡知被遊候御事と奉存上候必竟御縁組之義も第一御國內之人心一致爲致追々防禦之方嚴重之御備に可相成と之深重御趣意之邊にも御座候間右之邊深く御勘考被遊被下何卒御整に相成候様伏て奉希候事

右一帛

以別紙申達候然兼内々申進候御縁組一條之義關白殿に被申上御内奏被下候處其後關白殿に御趣意書御寫御渡に相成候由然處遠路往復日間も相懸り候儀且兼御自分迄申進置候次第も有之候間先づ御自分か押御歎願被申上候由之處尙又關白殿被仰聞候御口上之趣も有之候旨依之御趣意書御寫壹通右に添候關白殿御口上書寫一通御自分歎願書控壹通重而關白殿被仰聞候御口上書取壹通被越之到來被申越候趣夫々致承知候右之趣委細言上之上尙又御沙汰之趣も有之一同にも篤と致評議候處乍御内々御理之御趣意之處押御申上候儀は甚以奉恐入候へ共於當地も必竟御自分歡願被致候同様之次第に有之何分一朝一夕之義には無之候間別紙之通り御返答書相認候儀に有之候間可然被取計候様にと存候且又關白殿再應御口上之趣是又御尤至極之御儀に有之元來先帝之皇女之御事故主上にも色々深く御配慮被遊候趣誠以無勿體御次第にも有之候間其段は實に奉恐入候得共委細本番御請に申上候通之儀に付御本人様之處は却御手

厚に被成進候御筋にも相當り可申哉其上御産母は勿論是迄御附々之女中迄御供爲致候儀にも候は御本人様に御座候も格別御便りにも相成可申何分如何様とも御都合宜敷様之取計にも相成可申候間何卒此上御自分も精々盡丹誠御都合能御整に相成候様幾重にも被相願候様致度存候此段貴答旁申進候以上

五月廿六日

安藤對馬守

内藤紀伊守

久世大和守

酒井若狹守様

尙以中務大輔儀は病氣に付不能連名候以上

右一帯

和宮御縁組之儀に付先達御趣意書之御寫御渡被成下候付早速關東へ

相達可申處遠路之儀且兼年寄共申越候次第も御座候間先つ私御
歎願申上候處元來先帝之皇女にも被爲渡候間
主上にも深く御配慮被遊候被仰出候御儀にも御座候間於關東も得
と御勘考有之候様尙又被仰下候儀も御座候に付早速關東へ申遣候處
今便別紙兩通之通り年寄共申越候付則奉指上候右書面之通り於關東
も深く相願候儀にも御座候間何卒御勘考被成下御都合能御整に相成候
様於私尙又奉願上候事

六月

上包

酒井若狹守

右一昏

○

乍恐以書取奉申上候

今朝は參殿仕候處早速御目通被仰付難有仕合奉存上候其後益御機嫌能可

被爲成恐悅至極奉存候扱其節奉申上候昨夕殿下に被差出候閣老方之御
請書并に主人方へ之返翰且つ主人之添書共都合三通殿下御落手被遊候
旨今朝御返答被爲在候に付右寫三通例之通極密御廻し被進候間則奉差上
候儘に御落手被遊被下候様奉願上候右に付るも猶此上幾重にも御都合能
御運ひに相成候様御周旋之程尙又御頼被成度宜奉申上旨被申付候且つ此
度は別段正三様方へは御廻被成間敷候間久中正岩四方様へ從御前様宜
御通達被成進候様是又御頼被成候吳も宜御傳達被遊被進候様偏に奉希上
候今日已半刻過には殿下御參之旨嶋左申參り候左候へは定而夫是今日
御内奏被遊候御儀と奉恐察候先は右之段奉申上度乍恐以書中奉申上候以
上

六月四日

藤田權兵衛

三浦七兵衛

右一帛等也

一一 幕府へ再度被達の叡旨及關白への宸翰

萬延元年六月

一 蠻夷之事早々拒絶に相成候様可勘考之事
 一 神宮并御代々の對し申譯無之且昨年伊勢賀茂石清水等三社祈願も空敷
 相違之時は 神罰恐る敷存候事
 一 公武合體は申迄も無之一和之上は彌諸大名も徳川家を大節に守護致し
 蠻夷拒絶に可用力事

右三ヶ條關東の納得致し拒絶之事承知候は、早速和宮へ談判之上熟
 縁にも可及敷右三ヶ條之事尊公程能書つゝり予一應見候上若州へ御
 應對御丹誠頼入候事

右六 十八殿下へ被仰渡よし之處殿下迷惑十九日建卿を被招何卒御筆に
 て思召之通被書下度内願之よし也

○

六月二十四日殿下へ被下宸筆建通卿草案の上へ朱の通被加宸筆候て被遣せし也
 和宮縁組一條先達を返答申出す處若狹守より再願關東にも再願も歎之趣熟覽候元來此縁談
 不承知に有は無之公武間柄に於ても一和之上之和一和に深悦申候得共不
 得止儀有之候故一通り理申出候處何れに熟縁に相願候様歎願懇に付ては有
 體に申出試候兼るも毎々申聞候通り蠻夷之儀猶豫中之事故定る關東にも
 無助才拒絶方宜敷勘考も有之なれ共土地夷人居候の縁組之事故衆心も動搖可致歎元來蠻夷之儀
 は何く迄も拒絶に相成候様念願故既に三社にも幣使を差向祈願致し候程
 之事朕之代より蠻夷和親始り候ては實に奉對 神宮御始恐多奉對先帝無
 申譯是而已日夜心配候別而 先帝之皇女を夷人徘徊之土地の縁組候ては
 實以恐入候夫故六ヶ敷事ながら蠻夷拒絶に相成せめては嘉永初年頃之通關東之處
 置有之候は、尤無兎や角速に和宮へも申諭し早々縁組可治定談合なれ共此頃
 形勢之まゝにては前文之通甚心配に候定る和宮にも兼々夷族之事は被聞居且女心おそろしく被存氣毒に

に前文申勸兼本人も納得有間敷と存候存候何卒此儀程能組取一段骨折納得候は、彌諸大名も徳川家を大節に守候間誠以護致し萬代長久公武合體に皇國之神威顯れ悦敷存候何卒右様之邊に厚

勘考相成間敷哉候様致度深任心配在様申出試候事

右等之事申出候ては公武合體一和之邊に如何哉と關東に亦も疑念起り

候ては是又心配候得共不拘此縁眞合體一和之事に候今度只一通り又々理申出候ても矢張一和邊に差支申

候半故右體心中に申出試候程能若狹守に可申談候事

一二 觀行院より被入御覽の書翰 二通 萬延元年六月

六月二十日自觀行院被入御覽由廿一日以寫久予正三へ被見下

なほ、時かふせつかく御いとひ御念し申入、めて度かしく

一筆申入候暑まへを殊の外あつさに成、兩御地共御機嫌よくならせ

られ御愛度有難り、宮様にもます、御機嫌よく成らせられ候事御

めて度有難り、そなたさも御手まへ御初御揃まし御機嫌よく御入

の御事と御めてたさ扱は過月廿八日御用御取次坪内伊豆守との御内用

之儀に付面談致し度此方出候はつながら御役柄他出成り申さぬに付宅

に参りくれ候様との頼被付昨朔日出候ところ老中を段々傳言のよし

和宮様此御地へ御縁のき御懸合被成候處 御所にて先御承知にも有ら

せられ有栖川宮様關白様其外々御役中にも御同様の由にて橋本家の御内

達し所も來り候處とふか御手前を觀行院殿には難敷御ふ承知の由段々の

趣所司代を申越され一つの所何共御尤には存られ候よし然處此度の

御儀は一昨年來の御次第水戸殿も彼是の御次第にて兩御地先御折合

もよろしからす何とも關東にても恐入らせられ候御儀に付ては此たひ御

縁組等も遊され御親敷成らせられ候は、天下太平の御基と思召させられ

老中初一とう尙さら恐入候由何とぞ御調に致度かつは 御所何かの御都

合にも成らせられ候御事かた、御宜敷哉段々の申聞なから書取かたく

御手前にも御趣意の御處は御伺も候事先かひつまみ御趣意のみ申入候

右に付私をとくとく御さとし申して御承知之御座候やうにと申聞私に置候ても御兩人御心中は察し申御由緒なそあまり御よろしくも無願度とも存上は申さぬ事ながら御爲筋の御儀とては御由緒は御内々の御事御調にも成候様致さねはならぬ御事候てまへ迄にも右之所とくと御考にて御承知成候やう觀行院との御愛情之處も實に一同にも御尤には存られ候なから前文の御次第尙また嚴敷は御不承知と申所も何之行違ひ等も計かたくいつれにも私を申入候はとくと相分る事と何分にもよろしく申入御承知御座候よふ伊豆守殿を申聞に御座候御當人様へもとふかく申上にも成候得は關東は異人にも御こわくとの御沙汰のよし是も御尤様なから何も御城近に居候と申にも御座なくとへ何事御坐候ても諸大名初御役人中もあまた御坐候御事御心配には思召させられぬ様此由も御手まへ迄まで申入候よふと申聞に御坐候彼是風聞御聽にもいり右様之御さた御尤様と存上候此たひは御所を御直に御願のよし故御取扱も御格段の御

事いか様にもいか様にも思召通りにも成らせられ候との御事私にも何とも昨日之所には返とうも致しかたく直くせひく宰相中將へ申入申へくと挨拶致し置候段々の御申聞認め度なから行とくかぬ筆には尙さらの御事御汲とりにも御返とう御座候様是にて御承知之御返とうも御座候は上々の御事御分りかねにも御坐候は直さまいとうにも御下し面談にも申入へく候此挨拶いつの守へみせ候ま其思召にも御書取被下候やうにと存候くれも御爲筋思召上られ候て御承知之様にと存候殊之外御いそきのよし故一日も御早ふ御返事御まち申入候先々御用のみとりいそき申入候めて度かしく

水無月二日認め直に出す

勝光院

宰相中將

人々

内用事
いそき

右一昏

そへてくとうも申入候か御諸向に御承知之ところ御手前迄のみにてはさしつかへに成り候ては仰上の處は御尤ながら御爲にもよろしからぬ御事と存候まゝせひ御承知のやうにと存候有様にふか御内外も御無つかしく御斷も仰上られへき由ながら御内々御縁組もあらせられ候御事有様より仰上られ申さぬながらとふか御幸の御事の由にも御座候哉の御様子の内々咄も御座候嚴敷御不承知の處御察もなかやうに申思召のほともいかゝながら本文の次第故何分にも御汲取被下候觀愈にもたゝ今の處はとのやうに御殘多にも思召上の御事なからまたゝ又々はよろしきは次第にも成候御事も御座候と存候觀愈へも文上度さながら何分いそき認め居かたゝ外に申入文言も御坐なく同し御事故御手前様よりよろしく御傳言に御承知御座候様何れまた御跡申入れ候以上

右一昏

唯今は御文御參り御文中に天下太平に相成候は御すゝめと申事唯今の所先天下太平と申事に候右は異人ともみなゝ日本へ參らぬ様に關東にていたされ候上はと申事に候右のわけしたゝめたさながら御使いそき候まゝ書入不申候まゝ右之儀御承知なくては成不申候めて度かしく

はし本 宰相中將

觀行院様

一三 禁裡附大久保忠良關東差下の件

萬延元年六月十四日

六月十四日

一大久保大隅守儀御用向有之關東に差下候も於御所向御差支之儀も無之候哉此段及御問合候否早々被仰聞候様致度候事

六月

武傳被付以女房伺右伺濟申渡候

十五日

一今度御用に付關東の被 仰進候御書付爲 守護來十九日頃發足所司代

申付由附武士届候

十六日 武傳被附

御附大久保大隅守今度從 禁裡關東の重御用向被 仰進候御書付守護

被 仰付來十九日頃當地出立致候様相違候間爲御心得申進候事

右披露相濟申渡

十八日

大隅守依御用明日關東の出立に付拜領物以取次申出

十九日

同人御用物爲守護今十九日發出之旨附武士書取武傳被附以女房申入之

七月一日無滯着御用物月番老中安藤對馬守の渡候は同月 届出

一前々大樹上薦萬里小路橋本實久妹當今尼勝光院和宮一件熟談爲調上京申付七月 日

發足上京 到着之旨也

尼此儀不誰者再向東不下候由放詞云々行末難計唯宮之御心中奉察爲之如何

以切紙致啓上候然は昨十六日附阿蘭陀船一艘攝州兵庫沖の渡來碇泊いたし候趣相聞候付不取敢爲御心得此段得御意度如斯御座候以上

七月十七日

駒井相模守

小笠原長門守 宛

關 出雲守

老中

久世大和守五萬八千

內藤紀伊守五萬九千

脇坂中務大輔五萬千八十九

安藤對馬守五萬

本多美濃守五萬

御側御用人

水野出羽守五萬

若年寄

遠藤但馬守一萬二千

諏訪因幡守三萬

牧野遠江守一萬五千

酒井右京亮一萬

堀出雲守一萬

寺社奉行

松平伯耆守七萬

水野左近將監五萬

松平右京亮八萬二千

松平伊豆守七萬

御側衆

平岡丹波守 蜷川相模守 坪内伊豆守 藥師寺筑前守

岡部因幡守 大久保駿河守 室賀美作守 佐野日向守

遠山安藝守 堀田土佐守 大久保志摩守 小笠原加賀守

御留守居

佐野日向守 池田甲斐守 稻生 堀

加藤 酒井

大御目付

久貝因幡守 遠山隼人正 平賀駿河守 伊澤美作守

町御奉行

南 池田播磨守

北 石谷因幡守

御勘定奉行

山口丹波守 竹田豐前守

松平出雲守 松平式部少輔

塚越大藏少輔

御作事奉行

松平駿河守 水野伊勢守

御普請奉行

中村石見守 松平上野介

御小普請奉行

内藤飛驒守 荒尾石見守

軍艦奉行

井上信濃守 木村攝津守

十里四方鐵砲改

久貝因幡守

京町奉行

東 關 出雲守

西 小笠原長門守

伏見奉行

林 肥後守

大坂城代

松平豐前守

東 一色山城守

同町奉行

西 久須美佐渡守

甲府支配

酒井山城守

太田筑前守

外國奉行

溝口讚岐守

赤松左衛門尉

酒井隱岐守

村垣信濃守

鳥井越前守

堀 織部正

新見豐前守

升本圖書頭

松平石見守

長崎奉行

岡部駿河守

浦賀奉行

小笠原肥前守

坂井右近將監